



健ちゃんとわたし



ロシア

第1章

健ちゃんとわたしは、小さい頃の幼なじみだ。わたしは田舎の町のおんぼろアパートの一階に住んでいて、健ちゃんはその二階の住人だった。わたしはひとりっ子だったけど、健ちゃんは上にお兄ちゃんがいて——名前を巧くんと言った。わたしと健ちゃんと巧くんは、五つか六つくらいの時から気づくといつも一緒に近所の男の子たちと遊んでいた。鬼ごっこにかくれんぼ、だ・る・ま・さ・ん・が・こ・ろ・ん・だ……などなど。その他野球やサッカー、バッタやとんぼやアゲハ蝶の採集もした。夏の夜にはクワガタ虫を捕りにいったり、花火も毎年必ず二度か三度はしたっけ。健ちゃんが悪ふざけをしてロケット花火を地面に真横にして発射させると、それが巧くんに危うく命中しそうになったのをよく覚えている。冬には雪合戦や鎌倉づくりや橋遊び……それにスケートも。巧くんも健ちゃんもホッケーがすごく上手くて、あたしはよく試合の応援にいったものだった。

——今思うと、貧乏だった子供時代のあの頃、すべてが輝いて見えた。わたしの家は共働きで、健ちゃんの家もそうだったから、学校が終わるとすぐ、互いの家を行き来して、一緒におやつを食べたり遊びの計画を立てたり……巧くんも健ちゃんも、ふたりとも活発な男の子だったので、どちらかというところ＜鈍＞なわたしは、ふたりが近所の男の子たちと遊んでいるのを、ただぼんやり眺めていることが多かった。わたしには小さな頃から空想癖があり、みんなが空き地で野球をしたりサッカーしたりしている間、土管に座って試合を見ているふりをしながら、よく空想の世界へと翼を広げて飛び立っていたものだ。

小さな頃、わたしのまわりには見事なくらい女の子の友達というのがいなかった。近所にいるのは巧くんや健ちゃんと同じ、悪ガキタイプの男の子ばかりで——時々、仲間はずれにされたり、いじめられたりしたこともあった。でもその度に必ず巧くんか健ちゃんのどちらかが、わたしのことを守ったり庇ったりしてくれた。

今はそうでもないけれど、小さな頃、わたしは本当に泣き虫で、近所の悪ガキ連中に『おまえは女だから駄目だ』とか『女だから仲間には入れてやらない』と冷たく言われただけでも——目にはうっすら涙が溜まり、やがてそれはしくしく泣きへと変わった。今にして思えば、どうしてあのくらいのことで……と思うけど、子供ってというのはそんなものだ。特に男の子は残酷で無邪気な一面を持っていて、それは巧くんや健ちゃんも同じだった。

まずふたりがわたしのことを＜か弱い女の子＞だと思っていたとは考えにくい。ふたりはあくまでもわたしのことを異性ではなく同性として、対等に扱った。わたしは泣き虫ではあったけど——それは男の子たちの世界からシャットアウトされた時だけで、一度仲間に入れてもらえさえすれば、いくらでも彼らの冒険につきあった。

山登りや魚釣り、立入禁止の札が立っている工場地域に忍びこんでスパイごっこをしたりと、あたしは男の子並みのお転婆さを見せた。そのせいで二度か三度、怪我をしたりしたこともあったけど——あたしは膝から血が流れたり、手を切ったり、足首を軽くひねったりしても、べつにどうとも思わなかった。そういう時だけ、巧くんや健ちゃんも「そういえばこいつ、女の子だっけ」というように心配してくれたけど、わたしがこんな怪我くらいどうということもないと態度で示すと、ふたりはとても嬉しかった。そしてわたしも巧くんや健ちゃんが嬉しそうに笑って

くれるのが、一番嬉しかった。

その後、月日は流れて、わたしは小学校を卒業するのと同時に、両親の都合で引っ越すことになった。父が勤めていた会社で揉めごとを起こし、別の就職先を母の父——ようするに、わたしのおじいちゃん——に紹介してもらうことになったためだ。引っ越し、といっても学校の区分がひとつ離れた同じ市内ではあったのだが、あたしはその後、高校に進学するまで、巧くんにも健ちゃんにも会わなかった。

今でも時々思い出す……サイクリングロードを三人で自転車並べて走りながら、おたまじゃくしのいる池まで競争したことや、魚釣りにいって蛇に遭遇した時、慌てた健ちゃんが土手から川に落ちたこと、巧くんが蜂の巣を発見して、長い釣り竿の柄の部分で樹の上の巣を突つき、怒った蜂に追いまわされそうになったことなど……そうそう。これを忘れちゃいけない。一度わたしは巧くんや健ちゃんが、川に向かっておしっこを飛ばし合っているのをばっちり見ちゃったことがあるのだけれど——巧くんはわたしにその様子を写真に撮れといってカメラを握らせた。だが健ちゃんはそのことを全然知らなかったのだろう。わたしはその時小学校三年生くらいだったと思うのだけど、べつに恥かしいともなんとも思うことなく、ただ面白半分になんどもシャッターを切った。

ところが健ちゃんは大激怒。彼にしては珍しく、「女のくせに」とか「これだから女は」などとぶつぶつ言って、その後三週間くらいわたしとは口も聞いてくれなかった。その頃からわたしは、もしかしたら自分のことを＜女＞として意識しはじめるようになったのかもしれない、と今にしてみれば思わないこともない。何故って健ちゃんが口を聞いてくれなかったその三週間、わたしはもし自分が彼と同じ＜男＞だったなら——彼があんなにまで怒ることはなかっただろうにと、しくしく泣きながら過ごしたからだ。

引っ越しをする当日、巧くんはお別れのプレゼントとして、わたしの大好きなティベアのぬいぐるみをくれた。何しろ貧乏な出雲家のことだったから、当然手製。その縫い目は男の子らしく大雑把で、やもすると縫い目の間から綿が飛びでてきそうではあったけど——何故か彼の黒いボタンのお目々はどことなく健ちゃんに似ていて、あたしは今でも時々、このぬいぐるみの顔をじっと見つめていると、涙ぐんでしまうことがある。

荷物がトラックに全部積みこまれ、あとは三人の家族が新居に移動するのみとなったその時になっても、健ちゃんが二階から下りてくる様子はなかった。巧くんが何度呼んでも彼のお母さんが怒ったように叫んでもまるで駄目で、あたしは結局、巧くんと彼のお母さんにだけさよならの挨拶をして、トラックの真ん中の席へと乗りこんだ。

わたしはその時まだ全然子供で、出雲兄弟と別れることに対して、悲しみなどまるで感じていなかった。新しい家は一戸建ての小さな平屋の借家で、元のボロアパートから五丁目しか離れていないのだ。中学校は別々になってしまうけど、その気にさえなればいつだって、もう一度巧くんや健ちゃんと一緒に楽しく遊べるはずだ……あたしはそう信じて少しも疑いはしなかった。

けれども、なんというのだろう、思春期特有のなんとかというやつで、あたしと巧くんと健ちゃんはその後、一二度手紙のやりとりをし合っただけで、もはや一緒に花火大会をすることも、

毛虫や蜘蛛を素手で捕まえることも、蛙の処刑ごっこをすることもなくなった。もう子供ではないのだから、そんな子供じみた遊びを今さらするわけではないのだが、それでもやはりそうとわかってはいても——父さんがもし会社を変わっていなかったら、新しいおうちに引っ越していなかったら、あのボロ安のアパートに、上と下とで暮らしていたとしたら——あたしは巧くんや健ちゃんと、本当の兄妹みたいに今も一緒に過ごしていたかもしれないのになと、想像することは幾度もあった。

とはいえ、思春期は魔物。ある意味では、あたしはあの時、ふたりと離れてよかったのかもしれない。あたしは中学校で、軽いいじめのようなものに合い、いつもクラスで孤立していた。もしこれであたしが巧くんや健ちゃんと同じ中学校で、クラスの人間に相手にされていないところを見られていたとしたら——あたしはとても耐えられなかっただろう。でもこれは、大人になった今だからこそ言えることであって、当時中学生だったあたしは、もし自分が健ちゃんたちと同じ学校に通っていたら、いじめになんか合わなかったに違いないと思い、両親のことを随分恨んだりもした。だがそれも今はもう過ぎ去ったこと……あたしは友達もなく、他にすることが何もなかったため、その暗い三年間、少年刑務所にいるみたいな気持ちで、とにかく勉強に励んだ。あたしの両親はふたりとも中卒で、父は土木関係の仕事をしていたし、母はパートの清掃員だった。あたしはお父さんのこともお母さんのことも大好きだったし、働き者のふたりのことを尊敬してもいたけど——それでもやはり結局最後にものを言うのは学歴なのだと思ったのだ。クラスを仕切っている、いじめのリーダー格の仙石友美のような、頭カラッポの男の話しかしない女のいない世界、そういうところにいきたかったら、市内でも一、二を争う進学校へいくしかないのだと思った。そしてそういう場所では下品ないじめなどは（どちらかといえば）発生しにくいだらうと考えたのだ。

だがよもや——そう思って進学した高校に、巧くんや健ちゃんがいるとは、あたしは想像もしていなかった。高校に進学すると同時に、あたしがまず一番最初にしたことは、仮面を被ることだった。中学時代、いじめを受けていた暗い川原ちえみとはさようなら。眼鏡はコンタクトに変えたし（進学祝いにと、おじいちゃんが買ってくれたのだ）、ダサイ三つ編みの髪もやめたし、何故あんな前髪をしていたのか今では理解できないオンザ眉毛ともさよならだった。

幸いなことに、同じクラスに同じ中学の出身者がひとりもないことも手伝って——あたしは優等生、川原ちえみを気どるようになった。クラス内では常に成績トップ、学年内ではいつも十番以内という成績をキープする傍ら——HR委員長として、学校の行事にも率先して積極的に関わっていった。その結果、親友と呼んでもさしつかえないような友達もできたし、昔のあたしのような、かなり冴えないガリ勉タイプの暗い女の子とも仲良くなった……生まれて初めてラブレターなんていうものをもらったのもこの頃だったし、あたしはまさに高校では我が世の春を謳歌していた——廊下で、隣のクラスにいる、健ちゃんとすれ違うまでは。

何故彼の存在にまるで気づかなかったのか、迂闊というか不思議というか、なんていったらいいのかあたしにもわからない。健ちゃんは昔の健ちゃんとは全然違っていた——勉強のよくでき

るおぼっちゃんタイプが学年の九十七パーセントを占めるであろうその中で彼はだらしなくブレザーの制服を着くずし、髪を茶色く染め、右の耳にはピアスをしていた。そしてあたしのクラスではない、別のクラスの——同じように髪を茶色く染めた、軽く化粧している可愛い女の子と、いつも休み時間に廊下でしゃべってばかりいたのだ。

——あたしはショックだった。そしてショックのあまり、彼の存在に気づかないふりをしようとした。でも一学年上の巧くんとは、すぐに委員会関連などで親しく口を聞くようになった。彼もあたしと同じ、図書委員だったからである。

第2章

「へえ。それじゃあ健とは、まだ一度も口聞いてないの？」

健ちゃんとは違って、巧くんは雰囲気的にあまり変わっていなかった。昔と同じようにリーダー的存在としてまわりの人間をまとめるのが得意で、穏やかな優しい話し方をするとところも全然変わっていない。

「ねえ、巧くん。健ちゃんてばなんであんなふうにグレちゃったわけ？」

放課後、あたしは司書室で当番の巧くんとふたりきりになると、虫干しした本を整理しながら言った。

「ネクタイなんかだらしな一く緩めちゃって、あれ一体なに？もしかしてあれが格好いいとでも思ってるわけ？俺っていい男だとかなんとか勘違いしてんじゃないの？」

「それ、あいつの目の前で言ってやれよ」巧くんは笑いをこらえきれないというように、吹きだしている。「実はあれからうちも色々あってさ、俺は父さんの家に、巧は母さんの家に引きとられることになったってわけ。ここらへんの事情は、説明しなくてもわかるだろ？」

「うん……」と、あたしは黴くさい匂いのする宮沢賢治の詩集を手を持ったまま、曖昧に頷いた。

そうなのだ。あたしが小学生の頃から、上の階では夫婦喧嘩の物音が絶えなかった。何しろボロアパートなもんだから、天井や壁も当然薄いわけで……その喧嘩の理由も原因もすべて筒抜けだった。

「でさ、俺が中三で健が中二の時にふたりは別れることになったってわけ。こう言っちゃなんだけど、俺ってガキの頃から頭よかっただろ。母さんは自分がふたりとも引きとるって言ったんだけどさ、父さんが巧には十分な教育を受けさせてやりたいとか言いだしてさ……それ聞いてた健の気持ちがどんなだったか、ちえみにわかるかな。あいつ、夜中にボロボロ大泣きしてさ、なんにも言わなくても、俺には健の気持ち、すごいよくわかったよ。健にとっては、父さんの側につくか、母さんの側につくかなんてこと、そう大したことじゃなかったんだ。健も俺と同じで、兄弟離ればなれになりたくなかったっていう、ただそれだけ。母さんは父さんと別れてから、自分の店はじめてさ、夜働くからどうしても昼間は家でごろごろしてるだろ。しかも隣には離婚の原因になった愛人がいるんだもんな——なんか昼下がりのメロドラマみたいだけど、実際自分の身に起きてみると、結構きつかったりするんだよな、これが」

巧くんは溜息を着くと、軽く肩を竦めてみせた。これで非行化傾向にある少年Kの説明終わり、とでもいうように。

「……そっか。結構大変だったね、ふたりとも」

「まあね。ところでちえみのほうはどう？この間、写真部の荒木が俺のところにきて、こんなもの置いていったけど」

巧くんは制服の内ポケットから一葉の写真をとりだして、あたしに見せた——それには新入生代表として体育館の講堂に立った時のあたしが真正面から写っていた。

「うわ、不細工……よく撮ったね、こんなの。あんまり緊張してたから、写真撮られてるなんて全然気づかなかった」

「ああ、あいつは隠し撮り専門だからね。結構有名だよ。ヌード撮らせてくれるんなら、三万円までならだしてもいいって公言してるし。真面目なお坊っちゃんタイプが多いってちえみも思ってるかもしれないけど——それは表面だけだったりするからな。じゃないと内申に響くからね」

「ふうん、そうなんだ。あたし……あたしも——健ちゃんたちと別れてから、結構大変だったよ。陰湿ないじめに合っちゃったりとかしてさ。それで、がんばって変わろうかなあって思って、この高校にきたの。まさか巧くと健ちゃんがふたりそろっているとは思わなかったけど」

あたしが無理したように笑うと、巧くんはあたしの顔をじっと覗きこむようにして、真剣な目で、言った。

「健から手紙、いかなかった？あいつ、ちえみが引っ越してから、何度か手紙書いてたと思うんだけど……しよっちゅう郵便ポストを覗いては溜息ついたりしてたし。しまいには俺が『ちえみから返事こないのか？』って聞いたら、顔真っ赤にして怒っちゃってな。あいつの手紙の文面、今もよく覚えてるよ。『何か困ったことがあったら、自分に知らせろ』みたいな文章。俺にもさ、何か伝えたいことあるかって言うから、『熊のケンタロウは元気にしていますか？』って、熊の絵の横に書いておいたんだけど」

「え、嘘」あたしは本気で凍りついた。「そんな手紙、きてないよ。確か最初の一通か二通くらい、手紙がきたのは覚えてるけど……それ、今も机の引きだしにあるもの。でもそれ以外のは全然……」

「ははあ、なるほど」巧くんは突然合点がいったように頷くと、なんの前触れもなくげらげらと笑いだした。これが笑わずにいられるか、とでもいうような大爆笑だった。

「なあに？ひとりで笑っちゃってずるいわよ。どういうことなのか、きちんと説明……」

してよ、という言葉は、巧くんにごいと腕を掴まれたせいで、声にならなかった。昔は体のどこを触られても気にしたことなんかなかったのに——何しろ、風呂まで一緒に入った仲だったから——今は腕を掴まれただけで、意識してしまう自分がなんか嫌だった。

「最初の一通目と二通目は、俺が書いたんだよ。手紙の内容も宛先も全部。そしたら健の奴が、今度は自分が書くとか言いだしてさ、三通目も四通目も五通目も、ずっとあいつが書いたわけ。ちえみも知ってるだろ、健の奴の筆跡。ミミズが心臓発作か胃痙攣でも起こしたような、判読しがたい字だもんな。きっと郵便局員にもわからなかったんだろうよ、あいつの独特の文字は」

そう言いきると、巧くんはあたしの腕を離して、またさらに大きな声で足までばたつかせながら笑っていた。最後には灰色の事務机に突っ伏して、胃のあたりを押さえるようにしてやっこのことで笑いをおさめている。

「……でも、そんなことってあるのかな。もし宛先がわからなかったら、差出人の住所に戻ってくるんじゃない？」

巧くんは再びブツと吹き出すと、笑いをこらえるように、苦しそうに言った。

「だから、その差出人の住所と名前も、読めなかったってことだろ。あいつ、結構落ちこんでたんだぜ。ちえみが学校生活楽しくて、俺たちのことなんか忘れちゃったんじゃないかって。そうかあ。なるほどなあ。この真実は是非、健に直接教えてやらねば」

「え？ちょっとどこいくのよ、巧くん」

鞆を片手に立ち上がった彼を見て、あたしも慌てたように椅子を引いた。

「家の留守電にメッセージ入れてくるよ。今日は母さんのところでメシ食うって言っとく。よかったら、ちえみも一緒にくる？」

司書室の入口のところで巧くんは振り返ってそう聞いたけど——あたしにはまだとても健ちゃんに直接会うような勇気はなかった。それで、小さく首を振った。

「そっか。まあ、無理にはいわないけどさ、また三人で今度どっか遊びにいこうよ。健の奴も喜ぶだろうし……あ、そうそう。健にまつわる笑える話をもうひとつ。あいつが堀ちえみのファンなの、ちえみも知ってるだろ？」

「……うん、知ってる」

「あいつの部屋、いまでも堀ちえみのポスター張ってあるんだぜ。なんでだかわかる？」

わからない、という意思表示に、あたしはまた首を振った。

「名前が一緒だから、好きなんだってさ。ずっと口止めされてたけど、もう言ってもいいよな。何しろガキの頃の話だから」

そして巧くんは「時効、時効」と呟きながら、図書室を出ていった。そして西日の差しはじめた誰もいない司書室にひとり残されたあたしは——少しの間、追憶に浸ってから、重い鞆を手にとって、陽が完全に没する前に図書室を後にした。

『へえ、健ちゃん。堀ちえみが好きなんだあ。でもなんで？あたしは堀ちえみより、もっと可愛いアイドルの子、いっぱいいると思うけどな』

『どうしてもだ』と健ちゃんは何故か赤くなりながら言った。『好きになるのに理由なんてない』

……小学生のわりには、なかなか哲学的な答えではないか。そのとおり。誰かを好きになるのに、理由なんてない。巧くんは昔のとおり、頭がよくて格好よくて性格も優しいまんまだったけど——ついでに、笑い上戸なのも相変わらずだったけど——それはあくまでもひとつ上のお兄さんとして「好き」ということだった。でも健ちゃんとは——廊下ですれ違っただけでも緊張して、息が苦しくなって、どう考えても自然に話せそうになかった。

(……もしかして、これって恋？)

そう考えてあたしは、ああやだやだと、自分のそんな考えを慌てて打ち消した。まだ陰毛も生えてない頃に一緒に風呂に入った奴のこと、なんで好きにならなきゃいけないのよと、自分を茶化そうともしてみた。でもやっぱり駄目だった。

そして何か小さな衝撃の少ない変化が起きてくれることを——ただひたすらに願った。たとえば廊下ですれ違いざま、向こうから軽く声をかけてきてくれるとか、兄貴から話を聞いたとかなんか言ってくれるとか——でもそんな兆しは全然まったくなかった。健ちゃんは相変わらず、休み時間は廊下で、C組の可愛い女の子といちゃいちゃするようにしゃべくっているばかりだった。そして体育館の倉庫とか屋上で煙草を吸っているのを見つかったのは、職員室で注意されたり、上級生をカツアゲしたというので担任に叱られたりしていた。

最初は巧くんも、「思いきって話してみればいいのに」というようなことを言ってくれていたけれど、その沈黙の状態が半年以上も続く頃になると、もう何も言わなくなった。今ではもうす

っかり健ちゃんとわたしは赤の他人——どころか、真っ赤な他人、深紅の他人と言ってもいいくらいだ——廊下ですれ違おうが、共同の授業で同じ教室になろうが、体育館で整列した時に隣り合おうが——視線さえ合わせなかった。

そして高校二年の三学期、二月——あたしは懲りずにまた、マフラーを編みはじめていた。去年のバレンタインも、本当は健ちゃんにあげるつもりで編みはじめたのだけれど、結局その藍色のマフラーにはTの文字を入れて巧くんにあげてしまった。もっとも賢い彼はよくわかっている——本当はあたしがTのかわりに、Kの文字を入れるつもりでいたことを。

親友の美紀とさつきは、あたしが図書委員長の出雲巧先輩のことが好きなんだろうと、少しも疑ってなんかいない——休み時間に編み針を動かしながら話をする間も、チョコレートは手作りかとか、それとも市販で間に合わすのかどうかとか、そんな話ばかりだった。

ふたりとはこれまで仲良く、なんでも腹を割って話しあってきたけど——何故か健ちゃんのことだけはどうしても言いだせなかった。

「黒木健？ああ、あの変に悪ぶってるダサい不良」というのが彼女たちの見解で、あたしにしてみたところで「右に同じ」という意見ではあった——一応、とりあえず表面上は。

「まさかとは思うけど、今年もそのマフラーを俺にくれるんじゃないよね？」

放課後、司書室でせわしなく編み針を動かしていると、隣で巧くんが言った。『シャーロック・ホームズ全集』の第十六巻、『サセックスの吸血鬼』を読みながら。

「わかってるってば。今年はね、一応作戦があるの。この紺色のマフラーにKの文字を入れたら、チョコレートと一緒に、下駄箱に入れておくつもり。去年はたまたま、あのC組の女の子が卵型のチョコ渡すところ見ちゃったもんだから——渡すに渡せなくなったっていう、ただそれだけだもん」

「なるほどね。それはまた随分消極的な作戦だとは思うけど、成功を祈ってるよ」

図書委員長とあたしは、よくこんなふうにして放課後、貸しだしが終わったあとも司書室で仲良く居残っているため、一部の人間には「つきあっているらしい」と勘違いされている。確かに巧くんには特定の彼女というのはいないけど、彼はあくまでシャーロック＝ホームズのように——少なくとも大学受験が終わるまでは女っ気なしでいたいという、そういう優等生タイプなのだ。

「でも理解できないな。あたしがもし男で、巧くんくらいもてたら——絶対誰かと試しにつきあっちゃう。それで、きっかけがあったらキスしたりとか、チャンスがあったらおっぱいもみもみとか、そのくらいのこと経験したいなって思うと思うのよね」

「おっぱいもみもみねえ」と、巧くんは笑いながら本を閉じると、優しく隣のわたしの顔をのぞきこんだ。「つまりちえみは、健にならされてもいいなとか思うわけ？キスされたりとか、その他いろいろ」

「そういうんじゃないってば」

あたしは編み針を動かすのを止めて、丸い毛糸球やら、これまで編んだ五十センチほどの長さのマフラーのできかけやらを紙袋にしまいこんだ。流石に二月ともなると、陽が落ちるのが早い。そろそろ帰らないと、家に帰るまでに真っ暗になってしまう。

「じゃあ、たとえばさ、俺が」と、巧くんは椅子から立ち上がると、開け放しにしてあった司書

室のドアを閉めにいった。

「今ここで、ちえみに胸さわらせろとか言ったら、やらせてくれる？」

「やだ、冗談やめてよ、巧くん」

あたしはコートを手にとると、それを着ようとした。でも巧くんがそうさせなかった。そして隙をつかれたような形で、気がつく唇が重ねられていた——そのあと、自分がどんなふうにして家まで逃げるようにして帰ったのか、いまでも記憶が定かでない。

「どうしたの？ちえみ」

ただいまも何も言わず、居間を横切って自分の部屋の戸を閉めた。お母さんはちょうど天ぷらを揚げているところだったから——手が離せないということもあって、あたしのことはあまり気にしなかったみたいだった。夕ごはんの時に「何か嫌なことでもあった？」とは聞かれたけど、あたしは適当にごまかしておいた。

「ううん、なんでもないの。ただ犬に追いかけて、急いで家まで帰ってきただけ」

——それで話は終わった。とりあえずお母さんとあたしの間では。

お母さんはさつまいもの天ぷらをつまみながら、昔若かった頃、犬ではなく変質者に追いかけて物凄く怖い思いをしたことがあるという話をした。男がその気になったらあっという間に押し倒されてしまうんだから、夜道には気をつけなきゃ駄目よ、と。

次の日から、図書室に巧くんの姿はなくなった。それもそのはずで、三年生はもう自由登校になっていたから、東京の大学を受験する予定の彼は、勉強の追いこみで本当は今が一番大変な時期のはずだった。そのことを言っても巧くんはいつも、「今さらじたばたしたって、どうかなるもんでもなし」と茶化していたけど——もしかしたら、放課後、毎日のように司書室に居残っていたのは他に理由があったからかもしれなかった。

でも巧くんは、次にあたしと顔を合わせたとしたら、こう言うだろう——「あの時はちょっとどうかしてた」とか、そんなようなこと。そしてあたしも何もなかったような顔をするに違いない——「べつに、全然気にしてないから大丈夫」って、笑いながら……だけど、本当にそれでいいんだろうか？

あたしが頭を悩ませてるうちにも、その年のバレンタインデーの日はやってきた。巧くんがあたしにキスしたことを思うと、あたしもまた勇気をだして、健ちゃんに直接、マフラーと手作りのチョコレートを手渡すべきだったかもしれないけど——やっぱり消極的に差出人不明、メッセージカードなしで下駄箱に置いておくことにした。ずるい自己満足かもしれないけど、仕方ない。今のあたしにはそれが精一杯だったから……。

第3章

「これ、おまえが編んだんだろ？」

バレンタインデーの翌日の二月十五日、首に紺色のマフラーを巻きつけたまんま、健ちゃんは廊下であたしを呼びとめて、そう言った。いつものC組の子は隣にいない。でもあたしはできることなら逃げだしたくてたまらなかった。

「……どうして、あたしだってわかったの？」震え声で、やっとのことでそう聞いた。

「だってちえみ……」とあたしの名前を呼んでから、健ちゃんは失敗した、というように舌打ちした。「休み時間はいつも、なんか編んでたじゃん。紺色のマフラーっぼいやつ。巧にでもやるのかなあとって、ずっと見てたんだ」

「そう」

ちえみ、と名前を呼ばれた瞬間に、あたしは胸の鼓動がやや平常に戻っていくのを感じた。うまくいえないけど、一番高い山は越えたってというような、そんな安堵感。

「巧くん、元気？健ちゃんと違って、巧くんは頭いいから、受験のこととかは全然心配してないけど……東京の大学へいっちゃったら、寂しくなるね」

「何それ、おまえ」健ちゃんはどっと肩の力が抜けた、というように、図書室の前の壁にもたれている。「去年は巧にマフラーやって、今年はいつがいないから俺ってわけ？ちえみの頭の中って、一体どうなってんの？」

「さあ」と、あたしは首を傾げた。「去年も今年も、二本ずつ編めればよかったんだけど、何しろあたしってとろいでしょ？とりあえずひとつ編むのが精一杯だなあとって」

「ふうん」

健ちゃんはなんだか納得していないみたいだったけど、あたしの手をぐいと引っぱって、図書室の下の階、美術室の前の廊下へとあたしのことを連れていった。そこなら、朝八時十五分の今、人気はまるでないはずだった。

「こっちこいよ」

健ちゃんは寒い廊下で、手をこすり合わせるようにすると、スチームの上に腰かけている。あたしも、彼の隣にちょこんと腰を乗せることにした。

「巧から、話だけは聞いてた。俺が不良になっちゃったもんで、ちえみは話しかけられないらしいとか、そんなくだらない話……」

「違うわよ。そんなんじゃないってば」

「どう違うんだよ？じゃあさ、ちえみは俺の髪の毛が真っ黒で、ネクタイもきちっと締めてて、耳にピアスもしてなかったら、普通に話してたってか？そうじゃねえだろ」

「うん……それはそうかも」

「で、俺は考えた。そうか、人間っていうのは変わっちゃう生き物なんだ。三年前までは『健ちゃん、健ちゃん』って言って、後ろをついて歩いてたのに、今じゃあ他人のふりかって。巧はそれは違うぞって言ったけど、俺は全然そうは思わなかった。俺みたいのとなつきあってると内申点に響くとか、そういうくだらねえことを気にする女にちえみもなっちゃったんだなあと思
って……」

「違うってば！絶対そんなんじゃない！」

あたしはスチームの上から腰を下ろすと、健ちゃんと真正面から向きあった。

「それは、健ちゃんだって悪いんじゃないよ。いっつもいっつも、C組の女の子と廊下でいちゃいちゃして！巧くんはただの友達みたいだって言ってたけど、あたしは全然そう思わなかった！ずるいよ、健ちゃん。自分のことは棚に上げて、あたしのことだけ責める気！？」

「だから、話は終わりまで聞けって」

健ちゃんはあたしの肩を抱きよせると、もう一度、自分の隣に座らせた。手慣れたような、その馴々しい感じに、あたしはなんとなく苛々した。

「俺、てっきりちえみは巧のことが好きなんだとばかり思ってたんだ。そしたらバレンタインデーの前の日に電話がかかってきてさ、下駄箱にもし紺色のマフラーが入ってたならそれはちえみからだって、巧が言うから……それどういう意味って、聞いたんだ。そしたらあとは自分で考えろって言うからさ……」

「ふうん。それで、悪い頭で考えたの？」あたしはわざと茶化してやった。

「うん、まあな」と、健ちゃんは笑った。「ない知恵しぼって考えたさ。それで、ふーんそうか、そういう意味かって納得した」

「へーえ。それで、これからどうするの？」

「こうする」

健ちゃんは紺色のマフラーを外すと、あたしの首と自分の首とに巻いて、端っこの房であたしの鼻の頭をくすぐった。

「これから、どっかいこうぜ。ちえみの成績なら、一日くらいさぼったってどうってこともないだろ。腹いてえとか保険委員にでも言って、早退しちまえよ。俺は突然いなくなっても『ああ、またか』って扱いだから、なんも心配いらねえし」

「うん。じゃあ、ちょっと待ってて」

あたしは紺のマフラーを首からほどいて、健ちゃんの首にぐるりと巻くと、教室まで鞆をとりに行った。健ちゃんは『保険委員に腹いてえとでも言って……』なんて簡単に言ってくれたけど、保険委員にそんな権限はない。それに保健室にいったところで、「じゃあ薬あげるから、少し横になっていなさい」とかなんとか言われるだけだ。それだったら何か適当に理由をつけて、直接担任に早退届けを出したほうがどれだけ早いかな。

日頃の行いのよさが幸いしてか、入院中の大好きなおばあちゃんが今日手術をする、というあたしの法螺話を、秋山先生はあっさり信じてくれた。両親は学校へいけと言ったけど、やっぱりあたし心配で……そうか。じゃあ、先生も川原のおばあちゃんの手術の成功を祈ってるぞ、みたいな会話のノリだった。

「嘘つき。ちえみんとこのおばあちゃん、老人ホームに入ってるって言わなかったっけ？」

「巧くんから聞いたの？」

あたしはヘルメットをかぶると、健ちゃんのバイクの後ろに乗りながら言った。学校の裏手にある林に隠していつも登校しているらしい。

「まあ、それはいいさ。それより、後ろにしっかり掴まってろよ。人目につかないように、少し

遠まわりするからな」

それでも、健ちゃんの話によると、彼がバイクで登校してくるのは、先生方のほとんどにバレていたらしい。よくわからないけど、雰囲気から察するに、健ちゃんはそれほど先生方に悪評を買ってはいなかった。むしろおまえみたいのがひとりくらいいないと、教師生活に張りあいがない……健ちゃんの担任の安土先生などは、そう思っているような節さえあった。

「あいつ、妊娠にだけは気をつけろって言って、俺に Condom くれたんだぜ。信じられるか？」

ロッテリアでバニラシェイクを飲んでいる時にそんな話をされたので、あたしは思わず吹きだしそうになってしまった。

「健ちゃん、あたし今、バニラシェイク飲んでるんだけど」

「ああ、悪いわい。べつにそういう意味じゃねえから」

そのあと健ちゃんはしばし黙って、大好きなチーズバーガーにかぶりついていた。飲み物はファンタアップル。

「健ちゃん、好きなものだけは昔から変わってないんだね」

「ああ、まあな。ロッテリアにきたら注文するのは絶対にチーズバーガーとファンタアップルだ。それとポテト」

彼があんまり真面目くさってそう言うので、あたしは少しおかしくなって笑った。

「なんだよ？」

「ううん、なんでも」と、あたしはかぶりを振った。「変わったのは外面だけで、中身は全然変わってないんだなあと思って」

「どういう意味だよ？それを言ったらちえみだって……」

「ちえみだって、なに？」

「……変わったよ。始業式の日、講壇に立って挨拶してるの見て、すげえびっくりした。うちの学校って、ガリ勉タイプの冴えない女子が多いからな。その中ではまあ……わりと可愛いかなって」

「ふうーん」と、あたしは意味ありげに頷いてみせた。「ようするに健ちゃんは、あれだ。C組の大塚さん？ああいう女の子がいいんだ」

「萌はそんなじゃねえって。第一あいつ、彼氏いるし。知ってるか？あいつ今妊娠中で、今年の三月で学校辞めるんだぜ」

「えーっ、そうなの！？」

必要以上に、あたしは大声をだして驚いてしまった。廊下ですれ違いざま、軽く睨むあの目つきはどう考えても……嫉妬する女の眼差しだとしか思えなかった。

「そういうわけ。俺も高校卒業したら、萌の彼氏のいる会社に入って、タイル職人になろうと思ってるんだ。本当は今すぐ中退して働きたいくらいなんだけどさ、親方が……高校だけはきちんと卒業しとけて言うからさ。そしたら卒業後はきちんと面倒見てやるって」

「そっか。それが健ちゃんのやりたいことなんだ」

「まあな。それで、ちえみは？将来どうすんの？」

とりあえず、どっか大学行って……とは、何故か健ちゃんの前では言えなかった。巧くんの前

では、言えたけど。

「んー、まだちょっと考え中。保母さんになろうかなって、考えたりはしてるけど……」

「ふうん。ちえみなら、あってるかもな。子供と精神年齢一緒だから、向こうも懐いてくれるだろ」

「それはどうかなあ」

あたしはシェイクの底のまったりしたうねりをストローでかき混ぜると、健ちゃんの長い睫毛に見入っていた。そしたら「食べよ」と言って突然ポテトを口に放りこまれた。

「これから、うちにくる？」

トレイを下げながら、何気なく健ちゃんがそう聞いた。あたしは「もちろん」と答えつつも、なんとなく変な気持ちだった。巧くんのいない、健ちゃんとお母さんと、その恋人のいる家……健ちゃんがグレてしまった原因のある家。そう思うと、なんとなくだけど、少しだけ怖いような感じがしたのだ。

その真っ白くて瀟洒な、二階建ての洋館を見た時、もしかしたら健ちゃんのお母さんは離婚してよかったのかもしれないと、あたしは初めて思った。健ちゃんはガレージの脇にバイクを停めると、「ほら、ここ」と言って、白い鉄柵に囲まれた、広い庭つきの家にあたしのことを案内してくれた。

「すごいねえ、素敵だねえ」と、あたしはかつて自分たちが住んでいた、オンボロアパートのことを脳裏に思い浮かべながら、はしゃいだ調子でそう言った。

「そう喜ぶなよ」健ちゃんは溜息を着きつつ、ライオン型のノッカーのついたドアを開けている。「これ、全部借金なんだからさ」

「へえ……」

でも家なんてみんな、ローンで購入するものだし……なんて思いながら、ふくよかな木の香りの漂う玄関で靴を脱いでいると、健ちゃんが二階に続く階段のほうへ顎をしゃくった。

「下に、誰かいるの？」

そっと階段を上りながら、囁き声でそう聞いた。

「おふくろはもう店のほうにいったる。家にいるのはヒモだけさ」

あたしが小さな声で聞いたことに対して、健ちゃんはわざと大声でそう答えていた。そしてドカドカと足音も高く階段を上りきると、ひんやりした廊下を通過して、奥の部屋の茶色いドアを開けた——廊下に置いてあった二段のカラーボックスには、少年漫画の雑誌がびっしりと詰まっている。そのほとんどが少年ジャンプ。

「なんか飲み物とお菓子とってくるから、ちょっとここで待ってろ」

健ちゃんがそう言い置いて部屋を出ていったので、あたしは健ちゃんの、陽当たりのとてもいい、十畳ほどの室内を遠慮なく眺めまわした。机の上は普段まともに使っている形跡がまるでなく、真新しい参考書などが山積みになっている。ソファがひとつに、その上にクッションがふたつ。あたしは桜色のソファに腰かけると、四角いクッションを胸に抱いて、思っていたよりずっと綺麗にしてあるなあと感心した。そしてCDラックに百枚はあるかと思われる、洋楽のCDを何枚か引っ張りだして見たり、意外にも、本棚にびっしりと詰まった推理小説や怪奇小説など

を一冊一冊手にとっては、中をぱらぱらめくって読んだりした。

『うるせえな。てめえに関係あんのかよ』

『……のくせに、何言ってやがる。この家の建っているこの土地は俺のもんだ。それを忘れるんじゃねえぞ、生意気なこのくそ坊主』

あたしはラフカディオ・ハーンの『怪談』を閉じると、下から聞こえてくる罵声や怒声に、思わず耳を澄ませてしまった。ガシャーン、と何か、食器類が割れるか落ちるかした音が聞こえたかと思うと、バタン！とドアが閉まり、健ちゃんがドカドカと足音も高く階段を上ってきた。

「……どうしたの？大丈夫？」

「ああ、全然平気」

健ちゃんはあたしの心配そうな顔を見ると、にかっと明るく笑って、お盆の上のにせたコーラやジュース、それにポテトチップスなんかを小さなテーブルの上に置いた。そして煙草を一本とりだして、火を点けている。

「もしかして、新しいお父さんとうまくいってないの？」

「もしかしなくても、全然うまくいってなんかねえよ」と、健ちゃんは悪ぶったように言った。

「俺、近いうちに犯罪者になるかもな。ちえみはそれでも俺のこと、好きでいてくれるか？」

「なあに？そんなに嫌いなの、新しいお父さんのこと……」

「嫌いなんでもんじゃねえよ。大っ嫌いだ、あんなやつ。確かに、あいつが金だしてくれたから、母さんは自分の店を持てたのかもしれない。この家の建ってるこの土地だって、元々はあいつのもんだ。でもだからって、説教される筋合いなんか、これっぽっちもねえよ」

「……………」

あたしは押し黙った。ここまで話を聞いただけでも、あとのことは大体容易に察しがついた。おそらく健ちゃんのお母さんは、ホステスをしている時に今の旦那さんと知り合ったのだ。前の旦那はしがないタクシードライバー、それに引き換え愛人は土地と金を持っている……果たして秤にかけたとしたら、重いのはどちらだったのか？

「あのね、健ちゃん」と、あたしは暫くの沈黙のあとで、言葉を選びながら聞いた。「元のお父さんのところにいくってことはできないの？ほら、この家にいるのが嫌だったら、お父さんと巧くんと三人で暮らすっていうことだってできるじゃない」

「それができればなあ」

健ちゃんは吸いはじめたばかりの煙草を灰皿の上でもみ消すと、溜息でも着くみたいに、煙を吐きだしている。

「なんかさあ俺、本当は父ちゃんの子供じゃないんだってさ。おふくろは否定してるけど、少なくとも父ちゃんはそう信じてるみたいなんだ。だから父ちゃんは、巧は間違いなく自分の子だから引きとるけど、俺のことはいらんって、別れる時にはっきりそう言ったんだ」

……あたしにはもう、言葉もなかった。これがもし友達の彼氏とかだったら、「よくある話」で済ませてしまえたかもしれない。でも健ちゃんと巧くんのお父さんはあたしが小さかった頃、二番目のお父さんみたいな感じで、あたしともよく一緒に遊んでくれた人なのだ。あの温厚で優しくそうなお父さんが……そんな残酷なことを子供の目の前で言うとは、とても信じられなかった

。「なんか、ごめんな。つまんない話して。それよか音楽でも聴くか」

健ちゃんは機嫌を直したように笑顔になると、CDラックからニルヴァーナのCDを選んでかけた。あたしたちが高校生だった頃、カート・コバーンはまだ生きていて、銃を自分の頭に突きつけてはいなかったのだ。

『イン・ユーテロ』の『サーヴ・ザ・サーヴァンツ』が大音量でかかる。

「……ねえ、いつもこんな感じなの？」と、あたしは声のボリュームを上げて聞いた。

「こんな感じって、どういうこと？」

「だからあ、こんな下に響くくらい大きな音でガンガン音楽かけて、煙草吸って、本読んでののかってこと」

「ああ、わかったよ」

健ちゃんはリモコンでコンポの音量を下げると、隣に座るあたしの肩を抱いて言った。

「ちえみはさ、こんない家に住んで、高いコンポまで買ってもらってるくせに、これ以上一体なにが文句あるんだって、そう言いたいんだろ？俺はこんなもの、べつに欲しくなんかなかったんだ。向こうがさ、最初にゴマでもするみたいに買って寄こしたっていう、ただそれだけ。まったく恩着せがましいぜ、あの狸親父」

「健ちゃん、違うよ。あたしが言いたいのは……」

そこであたしは言葉に詰まった。肩にまわされた手から、健ちゃんの荒々しい感情が流れてくるみたいだった。俺はこんなに可哀想なんだ、俺は癒されない心の傷を持っているんだ、心がひからびたみたいにカラカラで、飢えてるんだ、だから俺の欲しいものをくれ、欲しいものをくれ、欲しいものをくれ……。

「ちょっと、嫌だってば！なにするのよ！」

気がついたら、健ちゃんのことを引っぱたいていた。

「いってえ。巧にはやらせたのに、俺にはキスもなしだよ」

「……巧くんがしゃべったの？キスしたって」

「ああ、まあな」と、健ちゃんは左の頬を押さえながらふくれっ面になって言った。「一応話しておかないと、フェアじゃないからってさ。魔が差したとかなんとか言ってたっけ。だからちえみにあやまっといってくれって」

「ふうん、そう……」

あたしは拍子抜けしたみたいに、ぼんやり頷いた。そしてもうこれ以上ここにいる理由も必要もないような気がしてきて、ソファから立ち上がった。

「あたし、もう帰るね」

「あっそう。勝手に帰れば？」

なんて憎たらしいんだろう、あたしはそう思ったけど、そのまま黙って鞆を手にして、部屋から出ていった。帰り際、ドアの内側に貼ってあった、古くさい堀ちえみのポスターと目が合ったけど——たぶん、昔の明星の付録か何か——あたしは堀ちえみのセクシーな水着姿を見ただけでも、腹が立って仕方なかった。

そして玄関まで階段を足早に下りていった時、どこことなく心配そうに上の様子を窺っている、

太った白髪頭のおじさんとぼったり鉢合わせてしまったのだった。

「……こんにちは。どうも、お邪魔しました」

あたしが礼儀正しく挨拶すると、向こうでも「こちらこそ」というように会釈して、どこことなく決まり悪そうにこそそとおじさんは居間のほうへ戻っていった。

(なんだ。結構優しそうな雰囲気、良さそうな人じゃないの。きっと健ちゃんはただの我が儘なだっ子なんだわ)

あたしはその時物凄く頭にきていたので、勝手にそう決めつけると、家までかなりの長い距離を歩いて帰った。

「うん、そう。うまくいったっていうか……今日早速喧嘩しちゃったけど。昔みたいに」

「ふうん、そっか。でも良かったじゃないか。これでとりあえず一步前進だろ？」

「一步前進ねえ」と、あたしは受話器に向かって思いっきり大仰な溜息を着いた。「あたしの気持ちって実は、恋愛感情じゃないのかもしれないって、今日健ちゃんと話してて思った。お父さんとお母さんが離婚したり、色々あって大変だったんだなって思いはしたけど……あれじゃあたしの、甘ったれたガキじゃないの」

受話器の向こうで、巧くんが笑っているのが聞こえる。

「まあ、そう言わずに。気長につきあっていけば？ああ見えて健って実は、俺よりもしっかりしてたりするんだぜ」

「そうかなあ。あたしはあまりそう思わないけど。巧くんのが絶対に全然大人よ」

「じゃあ、俺にもまだチャンスはあるってこと？」

「え？巧くん、それは……」

「冗談だよ。じゃあ、そろそろ切るな。それと最後に、『巧くん、受験大変だろうけど頑張ってる』って、励ましてくれないか？」

あたしは彼に言われたとおりの言葉を口にすると、コードレスの電源を切った。巧くんと話をしてる時のほうが全然楽し、思ってることなんでも話せるし、彼のほうが健ちゃんよりも断然大人でスマートで、余裕がある。図書室でキスしたことについても、真面目にあやまりながらも、どこか冗談のように軽く流してくれた——これであたしも卒業式、ただの先輩と後輩、仲のいい幼なじみとして顔を合わせられるし、寂しいけれど、駅まで見送りにいくこともできるだろう。

「……どうしてあたし、巧くんじゃなくて、健ちゃんのことを好きなんだろうな」

それは不思議な疑問だった。もしあたしが巧くんのことを本当に恋愛対象として好きなら——今から来年の受験に向けて、猛勉強を開始していることだろう。彼と同じ大学へいくために、あるいは同じ大学が無理でも、同じ東京にいたいがために、必死になって勉強するはずだ。

あたしは目標が決まると、意外に行動が速いタイプなのだけれど、健ちゃんが相手となると、何を目標としていいのかもわからなかった。そもそもあたしの場合、好きだからといってべつにキスしたいとか、エッチしたいとか、そういう感情とか衝動はあまりないのだ——とりあえず、今のところは。

「やれやれ。なんだか面倒くさいことになってきたなあ」

あたしは健ちゃんと再び昔のような関係になったその日の夜、嬉しい溜息を着きながら、眠りに落ちた。

第4章

C組の大塚さんが、もうほとんど登校してこないということもあり、健ちゃんは彼女と廊下でいちやつくかわりに、あたしのいるA組へしょっちゅう入り浸るようになった。当然のことながらびっくりしたのは、親友の美紀とさつきで——でも健ちゃんは、そののところ、よく心得たものだった。健ちゃんはその気にさえなれば、いくらでも人に対して愛想よく振るまえたので、ふたりはころっとすっかり騙され、休み時間にいつも健ちゃんが横にいても、邪魔者扱いになど全然しなかった。

「黒木くん、間違いなく犬だよ、犬」と、さつきが笑いながら言ったことがある。更衣室で着替えをしている時のことだった。

「そうそう。それも、ちえみにしか懐かない犬」

ふたりが忍び笑いを洩らしながら楽しそうに頷きあっているのを見て、あたしはとりあえず怒ったようなふりをしたけど——でも内心では少し得意だったし、そのことが嬉しくもあった。

あれから健ちゃんは家に遊びにいつでも何もしなかったし、巧くんと三人で彼の大学合格おめでどうパーティを開いたりもした。ようやくこれで幼なじみ三人、昔のような関係に戻れたというわけだ。そしてあたしはそうなってみて初めて、やっぱりまた自分が<女である>ということに対して、違和感を感じた。自分がもし<男>だったら——健ちゃんとふたりで女の子をナンパしたりとか、あるいは巧くんに向かっても、大学でいい彼女を見つけろよ、なんて軽い気持ちで言えたはずだった。

健ちゃんときつきあっていて何より面倒くさいのは、自分が女である、ということだ。あたしがこれでもし男なら、喫茶店で食事をしながら、可愛いウェイトレスさんのことをふたりで冗談まじりに品定めしたり、C組のなんとかって胸でかいよなとか、D組の吉岡ってマジ超大人っぽいよなとか、そんな話で盛り上がられたら——そしてあたしが健ちゃんに対して欲している関係というのは、まさにそういう友達として<対等な>関係というやつだったのだ。

「ふうん。でも俺は、ちえみが女でよかったって、今も本当にそう思うよ。それにそのことに気づいたのは俺が先じゃなくて、健の奴のほうだったからなあ。言ってみればまあ、先に唾つけたあいつの勝ちってわけだ」

「唾って何よ。なんかばっちい感じ」

——巧くんが東京の大学に入って、初めて迎えたその夏、彼は一時故郷に帰省して、『殺意のセラフィム』という推理小説を執筆中だった。あたしは途中まで読んで、すっかりその小説の虜になってしまい、続きはどうなったのかと残りの原稿をせっつくために、彼のアパートまで遊びにきていたのだった。

「ほい。これがペンタグラム殺人事件の続き。ちえみが途中まで読んだ感想、結構面白かったし、色々参考になったよ。残念ながら犯人は外れていたけどね」

「あ、やっぱし？でも流石文学部だね、巧くんてば。ねえねえ、もうシャーロック・ホームズのパロディは書かないの？あたし、巧くんが昔書いてくれたあれ、すごく好きだったの。『バスカヴィル家のバカ犬』とか」

「ああ、あれな」と、巧くんは苦笑している。「言ってみればまあ、あれが俺が小説を書く原点

みたいなものだったのかもしれないな。ところでちえみは夏期講習とかいかないのか？地元の短大を推薦で受けるのは、あくまでも滑り止めだって、手紙に書いてなかったっけ？」

「う、うん……」あたしは少し、言葉を濁した。「なんかね、近ごろ全然駄目なんだあ。さつきと美紀には恋愛ボケなんじゃないかって言われてるんだけど、そういうんじゃないで、勉強がなかなか手につかなくてね。うちって貧乏だから、できれば公立の四年制の大学いきたいってずっと思ってたはずなのに、何か特別これ！っていうなりたいものがあるわけでもないしさ……」

「もしかして、自分探しの旅ってやつか？」

巧くんは小学生の時からずっと使い続けている、シールがやたらにべたべた貼られた（ちなみにこれを貼ったのはおもに幼き頃の健ちゃんだ）、傷跡の多い木の机に座ったまま、ベッドに腰かけているあたしのことを見下ろした。

「どうなんだろ。それすらよくわかんないの。とにかく精神的に何やってもだるくて、それで健ちゃんにバイクの後ろに乗ってもらってスッキリしたりとか、なんかそんなことばかりやってんの。それよりもっと他にああしなきゃとかこうしなきゃとか、頭の中ではわかってる。でも机に向かって参考書開いても、全然やる気起きないんだよね。巧くんはそういうことってなかった？受験勉強してる間」

「俺は、そういうのはなかったけど……」と、巧くんは少し考えこむような顔をしたのち、

「じゃあさ、ちえみ。俺が東京に戻るまでの間、健も入れて三人でどっか遊びにいかないか？昔よくいったサイクリングロードを自転車で走って、おたまじゃくしのいた池までいってみるとか、『入るな、キケン』って看板の立ってたあの工業地帯……あそこらへんとかさ、ぶらぶら歩いてみようよ。今と昔じゃあ、大分あのあたりも変わっただろうからな。俺たちが住んでたアパートも、もう取り壊されてしまってるし、近くに馬のいる牧場があったらどう？あそこももう、馬なんて一頭もいなくなってるしな」

「え、そうなの！？」あたしは驚きのあまり、ベッドの縁から腰を上げた。「あの、有刺鉄線で囲まれた牧場だよな？夏になるとどこからともなく馬がやってきて、草を食んで……今も覚えてるよ、あたし。健ちゃんと巧くんと三人で、雑草の葉っぱあげたりしたじゃない。最初は噛まれたらどうしようと思って、こわごわあげたりしてたけど、馬がはむはむ食べてくれたら、すごく嬉しくて……」

「じゃあ、決まりな。健にはちえみから言っといてくれないか？どうせこれから会うんだろ？」

「うん、一応その予定だけど……健ちゃん大丈夫かなあ。夏休み中、レンタルビデオ店のバイト、結構びっちり入ってるんだよね。近ごろあいつ、『早く家をでて一人前のタイル職人になるんだ』っていうのが口癖だからなあ」

「で、ちえみと結婚して、子供をたくさん作るんだろ」

巧くんは笑ったけど、あたしは笑えなかった。どっちかっていうと、顔が引きつった。

「あたし、やだなあ。まだ結婚とかそういうの。遊びたいとかなんとか言うんじゃないで、あんまりそういうこと、まだ具体的に考えられないっていうか……」

「ちえみは昔からマイペースだからな。そんで健はせっかちなんだ。まあ、そのうち全部うまい具合にいくようになるさ。健はちえみ一筋だし、自分の家庭が不幸だったから、若くてもいいお

父さんになるだろうしさ」

「……………」

あたしは巧くんになんとも答えなかった。ただ彼から原稿の続きを受けとって、夜にまた電話するねと言って、巧くんの部屋を出た。

意外にも、巧くんの部屋は健ちゃんの部屋よりずっと散らかっていた。なんていうか、たとえば言うなら、これぞ『ザ・男の部屋』という感じだった。お父さんとふたりきりの男所帯なんだから仕方ない……といえは仕方ないのかもしれないけど、流石にあたしも巧くんのアパートにいった時だけは「よかったら、掃除しよっか？」と一言聞かずにはいられなかった。そして巧くんはその度に「いや、いいよ。どうせ三日もすればまた元どおりだから」と答えるのだった。

あたしは巧くんのアパートから、バスで健ちゃんの家に向かい、おじさんに一言挨拶してから、二階の健ちゃんの部屋で待たせてもらうことにした。おじさんとはもうすっかり顔馴染みだったし、気心の知れた仲でもあった。それで、ソファに腰かけて、巧くんの書いた推理小説の続きを読みながら、一応彼氏であるらしい男の帰りを静かに待っていた。

『どうして、こんな恐ろしい殺人計画を思いついたんですか？彼を殺したところで、香那子さんが、あなたのものになるわけでもないのに……』

『あなたになんかわかりませんよ、僕のこの気持ちは。人を愛したことの無い人間に、一体なにがわかるんですか？出雲さん、すべてはあなたの推理どおりかもしれないが、それでも少なくとも僕は——あなたよりは遥かに幸福な人間だ。僕は香那子を愛している。彼女が幼い頃から、ずっと今に至るまで見守り続けてきたんだ。そして、彼女の中で僕の存在は永遠になった。何故って、僕は香那子を守るために……そのためだけに、これまで六人もの男を殺してきたんですからね！忘れようたって、忘れられるものか。ねえ、そうだろう？香那子……』

「よう、来てたのか」

健ちゃんは二階の自分の部屋まで上がってくると「まったく、今日もあちいな」と言いながら、早速エアコンのスイッチを入れた。窓を全開にして、一台の扇風機でどうにかこうにか暑さを凌いでいる出雲家とは、雲泥の差という気さえしてしまう。

「バッカじゃねえの、おまえ。俺いなくてもさ、エアコンくらい黙って入れとけよ。そしたら俺も帰ってきてサイコー涼しかったのにさ。なにそれ？もしかして巧の小説？」

「うん、そう」と、あたしは健ちゃんに素っ気なく返事した。犯人と殺害のトリック及びその動機も判明したが、あともうちょっとでエピローグまで読み終わるのだ。それにしても、主人公の探偵、出雲健一郎は格好いい。彼は過去にトラウマがあって、女性を愛することができないという設定も、なんだか妙に女心をくすぐられる。

「ふうん。で、面白いの？」

「うん、面白い」

あともう少して読み終わるから黙ってて、という意思表示に、あたしは手に持っている原稿用紙を数枚、ひらひらさせた。健ちゃんにはあたしの言いたいことがわかったようで、ふくれたように、テーブルの上の煎餅をばりばり食べている。

「あー、面白かった。きっと巧くんは作家になるね。それでTVでドラマ化されちゃったりするの。どうする、健ちゃん？そしたら健ちゃんは有名作家の弟だよ」

「アホか」と、健ちゃんは馬鹿にしたような目つきで、隣のあたしのことを見た。「俺は巧の書いたものを読んだことはないけど、大体想像はつくよ。なかなかいいもの書いてるんだらうなってことくらいはね。だけど、作家になれるかどうかってのは、また別の話じゃねえの？大学の文学部でたってだけで作家になれるんなら、この世は小説家だらけになっちまうぜ」

「わかってないなあ、健ちゃんは。あたしが今持っているのは途中からだから、今度一番最初のところから読ませてもらいなよ。そしたら考え変わるから」

「まあ、今度な」

健ちゃんはそう面白くなさそうに言い、そのあと、ベッドとTVのある隣の寝室で、今はまっているRPGのゲームをやりはじめた。

あたしはベッドの端に座りながら、少年ジャンプの最新号を読んだり、ピザを摘みながらコーラを飲んだりしていた——時々、健ちゃんが構ってくれないかなと、彼の様子を窺いながら。（でもまあ、このゲームがクリアできるまでは無理だろうな）

あたしはそう思いながらTVの画面をぼんやり眺め、その昔、健ちゃんや巧くんがどうしてもファミコンが欲しくて、お母さんに駄々をこねていた時のことを思い出した。

『友達みんな持っているんだよ。ファミコンがないのなんて、うちくらいのもんだよ』

我が家にもファミコンはなかったが、それでもあたしは女の子だったせいか、ドラクエのダンジョンがどうのとか、そんな話についていけなくても、学校生活に一向差し障りはなかった。今では巧くんの家にもプレイステーションがあるし、毎日のようにゲーム機に電源入れてるのは俺じゃなくて、親父のほうだという話も聞いている。でもあたしや巧くんや健ちゃんがまだ小学生だった時——まわりの子供たちには一家に一台あるのが普通でも、我が家がオンボロアパートの住人にとっては、それはとても高価な品物だった。

あの頃のことを振り返ると、今でも時々少し考えこんでしまうことがある。健ちゃんの家もわたしの家も、普通の中流家庭の水準よりも少し収入が下のほうで——それを不幸と思ったことはないにせよ、『みんなと同じ』になれないことほど惨めなことはないと感じた記憶はある。その頃はまだ幼かったので、具体的に言葉としてうまく言い表すことはできなかったけど——それはたぶん、こういうことだったのだと思う。仮にどんなに貧しかったとしても、まわりのみんなが自分たちと同じくらい貧しかったとしたら、それはそんなに不幸なことではないのだ。それと比べてもし、まわりの人間がみな豊かで、自分の家だけがひどく貧しかったとしたら、どんなにつらい思いを味わわなければならないか——今ではあたしの家も巧くんの家も、まあ中流くらいかなという感じの暮らしぶりではある。あたしのお父さんはボーリングの資格をとって、なかなかの高給とりになったし、巧くんのお父さんはタクシードライバーからトラックの運転手になり、以前よりずっと稼げるようになったと聞いている。

（でもあたしは、穴のあいたジャージの膝に、チューリップのアップリケをつけたりしてた、あの頃のほうが今よりずっと……）

「げげっ！そんなのアカいよ。ここで全滅したら、セーブ前からやり直しだぜ」

あたしはあんまりゲームをやったことがないので、健ちゃんの言ってることがよくわからなか

った。でも画面を見るに、ボスキャラを相手に戦っていて、仲間のうち三人が死亡しているのがわかった。そして最後の生き残りである主人公らしきキャラクターもまた、虫の息だった。

「ぐおっ！やられた！」

健ちゃんは絨毯の上に引っくり返ると、頭を抱えこみながら、プレステのリセットボタンを押している。

「チェッ、またやり直しか……」

そしてたった今その存在を思いだしたというように後ろのあたしを振り返り、ベッドの上に横になると、図々しくも太腿の上に頭を乗せてきた。

「あーあ、なんかついてねえなあ。バイト先でも店長に叱られるしさ……やめちまうかなあのバイト。金も結構たまったしさ」

「何いってるの。お金がたまったのは、月に三万円もおじさんからお小遣いもらってるからでしょうが。どうしてもっと仲良くできないのよ、あんたは」

「違うって。あの金はおふくろが稼いできた金だもん。適当に土地転がしてれば金が入ってくるなんてさ、なんか世の中不公平だよな。それにあの親父、アパートとかマンションの家賃収入もあるからな。老後の生活は安泰ってわけだ」

「まったくもう、健ちゃんは……」

そう言いながらもあたしは、彼の前髪を撫で、健ちゃんが気持ちよさそうに目を閉じているのを見下ろしていた。

「今日、巧のとこいつてきたの？」

「うん。小説の続きが気になったからね……そうそう。今度健ちゃんとあたしと巧くんの三人で、昔の思い出の場所にいかないかっていう話をしてたんだけど、健ちゃん暇ある？」

「昔の思い出のばしょお！？」と、健ちゃんは突然がばりと起き上がった。「そんなとこいつて何するんだよ。この年になってからいまさら、蛙とったりバッタとったりトンボ捕まえたりして、何が面白いんだよ……まあ、釣りにいくくらいなら、つきあってやってもいいけどな」

「本当！？」あたしは嬉しさのあまり、声を弾ませた。「じゃあ、いつにする？巧くんもうあと一週間くらいしかこっちないしさ、いくんなら、早いとこいこうよ。あたしたち、来年はまたどうなってるかわからないし」

「ちょっと待て。今バイトのシフト表調べるから……げげっ、駄目だ。一週間のうちたったの一日しか遊べる日ねえもん。よっしゃ、わかった！俺明日からはもうバイトいえねえわ。それでおまえらのくだらない思い出の場所ツアーとやらにつきあってやるよ」

「まったく、しょうがないなあ」

あたしはそう言いながらも、この時だけは少しばかり嬉しかった。といっても、バイト先をやめたなんていうことになると、おじさんがまたくだくだと健ちゃんに説教をしまして喧嘩になるのだろうなというのが、少しだけ気がかりだったけど。

第5章

——その夏の終わりも近い一週間のことを、あたしは……というより、あたしたちは一生忘れられないだろう。あたしたちが昔住んでいたボロアパートは今ではすっかり取り壊されて見る影もなかった。鉄の柵で囲まれた更地に、『売地』と大きく書かれた看板がひとつ、ぽつんと立っているだけ。すぐそばの、よく野球やサッカーをした広い空地はすべて新興住宅地の一部と化していたし、夏になると馬がやってきた牧草地も、同じ状態だった。

サイクリングロードの第一休憩所と第二休憩所の間にあった池も、今では埋め立てられてしまっており、唯一変わっていなかったのは……よく魚釣りをしにいった川の、上流付近だけだったかもしれない。

「ねえ、この花の名前、なんだか覚えてる？」

三人で裸足になり、釣り竿を手にしたふたりと、川の中をゆっくり歩いていった。陽気はとても麗らかで、川の水温が足にとっても心地好い。

「その小さい白い花？……ええっと、なんだっけ？俺たちはアメフリソウって呼んでたけど、それは正式な名称じゃないと思うんだよな」

巧くんはイクラの小瓶の蓋を開けると、それを釣り針に刺しながら、ぼんやり言った。健ちゃんはすでにもう完全に釣り人モードで、先に川をずっと向こうの、大きな柳の垂れ下がった、大きくカーブしているところまでいっている。彼はあの場所で昔、大きなヤマメやイワナを釣り上げていたが、果たして今も同じように釣れるのやら。

「そうよ、アメフリソウよ！」と、あたしは川のせせらぎと同じくらいの小さな声で、囁くように言った。魚たちが人間の声にびっくりして、逃げだしたりしないように。

「あたし、健ちゃんたちが教えてくれたあの迷信、中学生になってからもずっと信じてたのよ。アメフリソウを摘んだ次の日は絶対に雨が降るっていう話……その話を健ちゃんがしてくれた時、試しにあの小さな白い花をいくつか摘んでみたの。でも翌日はかんかんの快晴だった。それであたしが健ちゃんのこと『嘘つき！』って言ったら巧くん、『健は嘘つきじゃないよ。ちえみは花と葉っぱの部分をとっただけだろ？あれは根っこから引き抜かなきゃ駄目なんだ』って、そばにあったアメフリソウを片っ端から根っこごとそっと引き抜いて行って……」

巧くんはもう、あたしの話なんて聞いていなかった。頭をぼりぼりかくと、どうもこの場所は駄目みたいだというように、ぎぶぎぶとさらに上流へ進んでいく。

（駄目だこりゃ）と思ったあたしは、くだらないおしゃべりをやめて、大人しく、黙って静かに彼のあとについていった。健ちゃんは川のカーブした、大きな柳の樹の下にはもうおらず、もっと山の奥のほうへと進んでいってみたいだ。もはや姿がどこにも見えない。そして巧くんは、健ちゃんがいなくなったあとのポイントに釣り竿を垂らして、岩の上でじっと待っている……あたしは土手にあがると、そんな巧くんの静かなる釣り人の姿を見守ることにした。（おそらくは雄の）揚羽蝶が何羽も視界を横切っていき、あたしのすぐそばの地面で水を吸っていた。

——アメフリソウを根っこからもぎとった次の日、大雨がやってきた。たぶん巧くんは天気予報か何かで見て、雨になるだろうと知っていたんだろうけど……その時七つか八つくらいだったあたしは、自分たちがアメフリソウを引っこ抜いたせいで雨が降ってきたんだと信じて疑わなか

った。そして実に不思議なことに、そのあとも気まぐれにアメフリソウを根から引っっこ抜いた日の翌日には、必ず雨が降ったのを、今もよく覚えている。

「おめでとう、巧くん！」

巧くんが中くらいの大きさのヤマメを釣り上げたのを見て、あたしは小さく拍手した。

「馬鹿だねえ、健ちゃん。もう少しねばってれば、釣れたのにね」

「さあね。昔から釣りは俺よりも健のほうが上手かったからな。場所を譲ってくれたんだろ」

なんて謙虚な巧くん。彼は昔からそうだった。健ちゃんがひとりずんずん先へ進んでいってしまっても——彼は時々ちょっとだけ振り返って、あたしのことをきちんと気にかけてくれるのだ。

「さっきの話、思い出したよ。ちえみ、あんなつまらない嘘に引っかかるんだもん。つい可愛くて、その他にも色々デタラメ言ったの、覚えてるか？」

「覚えてるわよ。たとえばあの背の高い、白い花。なんという名前か知ってる？」

あたしは川の向こうの野原にいっぱい咲いている、背の高い白い花の群れを指さした。

「ああ、知ってるよ。シシウドだろ」

巧くんも思い出したらしく、にやりと笑っている。

「あの花は毒草です。さて、どうしたらあの花で人は死ぬのでしょうか？ 1. なめる 2. 匂いをかぐ 3. 触っただけで死ぬ……さて、どれでしょう？」

「やめてよ、もう」と、あたしは巧くんと並んで歩きながら、彼の背中を叩いて笑った。「その話もあたし、中学生くらいまでずっと信じてたのよ。そうか、あの花をなめただけで人は死んでしまうんだって……巧くんはみんなのリーダーだったから、なんていうのかなあ、彼の言うことには絶対服従みたいな雰囲気、あったでしょ？ そのせいかなあ。あたし、小さい時、巧くんの言うことはなんでも本気で信じてた気がする」

「ハハハ」と、笑いながら、巧くんは足で川の水を引っかけて寄こした。「でもひとつだけ、俺にとって今でも忘れられない汚点があるよ。いつもちえみのことをいじめたり、仲間外れにしようとした奴がいただろ？ 俺と同じ年の猿渡って奴。あいつが健と喧嘩になって、荊の生垣に突っこんでさ、全身棘やら引っかき傷だらけになった時……まあガキ同士の喧嘩とはいえ、流石に猿渡の母ちゃんがうちのおふくろに文句言いにきてさ。でも俺、健のことを庇って、あいつはひとりで勝手に荊の生垣に突っこんだんだって言っちゃったんだ。まわりで喧嘩を見てた奴は全員、本当のことを知ってるわけだから——健がはずみで、あいつのことを生垣の中に押しこんだって——まさかそれが本当になるとは思わなくてな。他の近所の子供もみんな、異口同音に、そうです、猿渡くんは自分から生垣に突っこんだんですって言ってさ。最後には猿渡自身までが本当はそうだったんだって、母ちゃんに対して認めるんだもん。くだらない、些細なことかもしれないけど、俺はあれ以来どんな小さな嘘でもついちゃいけないもんだって、そう思うようになったよ」

「ふうん、そっか。でもあたしはそんなふうには全然思わなかったよ。もちろん、ざまあみろとか、そんなふうにしたわけでもないけど……みんな、本当は心の中では猿渡くんのこと、嫌ってたじゃない。だから日頃の不満がそういう形で表れたんじゃないかって、そんなふうには思

った」

「まあな。そうかもしれないけど……」

あたしたちは小さな声で囁くように話しながら川を上流に向かって歩いていくと、ずっと向こうから「おーい！」と大きな声がした。見ると健ちゃんが、嬉しそうに息を弾ませながら、川をざぶざぶ水を跳ねさせながらやってくる場所だった。

「これ見ろよ。でかいだろ！まあ三十センチはあるな」

「イワナか」と、巧くんまでもが目を輝かせている。「俺はさっき健がいた柳の樹のところで、ヤマメを一匹釣っただけだけど……どうする？もうちょっとねばるか？」

「もち」と言って健ちゃんは、またひとりざぶざぶ上流に向かっていった。時計を見るとちょうど十二時。あたしは手に持っていたバスケットに目をやった。

「腹へったんなら、先にサンドイッチ食べてていいよ。俺も健に負けられないからな。ちょっと本気でやってくるわ」

あたしはやれやれと言うように、出雲兄弟の背中を見送り、時々サンドイッチをつまみながら、川の土手沿いに歩いていった。こういうところは、ふたりとも全然変わってないらしい。

その日は結局三時近くまでふたりは魚釣りに熱中し、合計でアメマス二匹、イワナ三匹、ヤマメを七匹釣り上げた。アメマスとイワナの大きいのを一匹ずつ釣り上げたのは健ちゃんだったけど、ヤマメを五匹釣った巧くんのほうが、数の上では勝っていた。あたしたちはレンタカーを返してから巧くんのアパートまでいき、とり散らかった台所の洗い物などを片付けたあとで、アメマスとイワナは塩焼きにして、ヤマメはフライにして食べた。とても美味しかった。

そしてあたしが鍋や食器類などを洗ってそれを布巾で拭いていた時——健ちゃんがいわゆる裏ビデオなるものを、山積した衣類の下やら、埃だらけのビデオデッキの横から発見して、お願いだから貸してくれと、兄に懇願している声が聞こえた。

「もしかして、親父の？そうだよなあ。男ふたりの生活じゃあ、無理ねえよなあ。おお、これは松島まりあちゃんの写真集じゃありませんか！貸してください、お兄さん！いや、お兄さま！」

そのあと健ちゃんは、あたしが見ていてあきれくらい——その手のエッチな写真集やら雑誌やらを手にして、出雲家のアパートを意気揚々と出ていこうとしていた。

「いやあねえ、これだから男って」

あたしは暮れなずむ空の下を、健ちゃんとふたりで肩を並べて歩きながら、わざと軽蔑したようにそう言ってやった。せっかく三人で、思い出の良き日を振り返りつつ、美味しい食事をしたあとだっていうのに——美しき懐かしの思い出の場所ツアーのしめくくりがこれでいいのかと、疑問を呈してやりたくて仕方なかった。

「しょうがねえだろ。ちえみ、いつまでたってもやらせてくれないし……まあ、仮にやらせてくれたとしても、男にとってこれとそれとは別だけだな」

「やらしいわね、もう」

あたしはもう一度、軽蔑したように、健ちゃんが大切そうに抱きかかえている、布製の厚い手提げ袋をちらと見やった。

「そうカマトトぶらなくてもいいじゃんか。第一、これはちえみの尊敬する巧兄さんのものなん

だから、俺がいやらしいってことは、巧だって十分いやらしいっていうことなんだぜ」

「あたしはそういうことを言ってるんじゃないの」

第一、巧くんは健ちゃんがよく鼻の利く犬のように、次から次へとエロ雑誌やら写真集やらを発見するので、多少罰が悪いというか——そういう表情を微かに浮かべていたような気がする。最後にはもう、開き直っていたけど。

「じゃあ、どういうことだよ？俺はとても素直なオープンスケベだけど、巧はどっちかっていうと、ムッツリスケベタイプだからな。ちえみも気をつけるよ、いつだったか、キスされたみたい……」

「もう、やめてってば！」

あたしは健ちゃんのことを突き飛ばすと、早足になって、やがては思いきり走りだして、彼のことを置いてけぼりにした。そして健ちゃんが追いかけてこないのがわかると、速度を落として、バス停でぼんやりしながら、バスがやってくるのを待った。

べつに、健ちゃんのことを怒ったわけではない。彼は自分で言っていたとおり、かなりのところあけっぴろげなオープンスケベというやつだった。あたしにも色々、こういう時男だったらこうだけど、女だったらどう感じるかということ、何度か聞いてきたことがある。たとえば——女でもエロビデオを見たら感じるのかとか、そういうこと。あたしが見たことないからわからないと答えると、じゃあ一緒に見ようと言ったけど、流石にそれは断った。

バスに揺られて、家の近くまで辿り着くまでの間——不吉な感じのする、灰色や薄墨色や、真っ黒な暗雲が三重に折り重なったような不気味な空を窓越しに見ていた。輝かしいオレンジ色の太陽はすでに没し、藍色の夜の吐息が聞こえようとしている。この空模様だと、明日は雨かもしれないとあたしは思った。そして思いだした。サンドイッチを食べながら、一度アメフリソウを根っこごと引き抜いてしまったことを。

雨になった次の日、あたしは健ちゃんと一緒に、駅まで巧くんのことを見送りにいった。巧くんは太っ腹にも、健ちゃんにエロ本やら写真集やらをただでくれると言い——きのうは早速あれをおかずにして、寝る前に一発抜いたとか、何かそんな話ばかりしていた。

「可愛いよなあ、松島まりあちゃん。一度でいいからあんな可愛い子とやってみたいよな」

「おまえ、堀ちえみはどうしたんだよ」と、待合室で巧くんが笑う。

「それに、ちえみがいるだろ」

「ちえみは全然駄目」と言って、健ちゃんは顔の前で手を振っている。「バストサイズがいくつかって聞いただけでも怒るからな、ちえみは」

「当然じゃないの」あたしは隣の健ちゃんの腕を、思いっきりつねってやった。「なんでわざわざそんなこと、健ちゃんに教えなくちゃいけないのよ」

「なんでって、彼氏の特権ってやつだよ。なあ？」

巧くんは同意を求められても、どこか曖昧に微笑んだだけだった。

「まあ、急ぐことはないだろ。ふたりともまだ若いんだし」

「なにジジむさいこと言ってんだよ。若い人間には今が一番大切なの。第一巧だって、俺らと一個しか変わらないじゃん」

「そりゃそうだけどな……まあ、俺がいなくなったら、またふたりでよろしくやればいいさ。邪魔者は東京へ帰るよ」

そう言って巧くんは立ち上がると、わたしにも「じゃあな」と手を振って、改札口へ向かっていった。ポストンバッグをふたつ持った彼の姿が人の波に紛れて見えなくなると、あたしはなんとなく、寂しいような物足りないような気持ちになり、「あーあ。巧くん、いっちゃった」と、ひとりごちた。

「なんだよ、それ」と、途端に健ちゃんの機嫌が悪くなる。「おまえさあ、本当は俺より巧のこのほうが好きなんじゃねえの？馬鹿な弟より、賢い兄のほうを選べばよかったって、後悔してるんじゃないか？」

「かもね」

ああ馬鹿らしい、と思ったあたしは、椅子から立ち上がり、メロンソーダを飲み終わったあとの紙コップを、ゴミ箱のある場所まで捨てにいった。当時はまだ駅の中に喫煙室が設けられていなかったの、待合室は煙草の煙の匂いが充満していた。健ちゃんもまた、煙草をもみ消して立ち上がると、あたしの肩を抱きよせ、

「これからどっかいくか？」と、聞いた。

「んー、なんかお腹すいちゃった。確か地下にミスドあったよね？食べていかない？もちろん健ちゃんのおごりで」

「おまえ、ほんとたかるの得意な。でも俺あんまし今ドーナツ食いたくねえ。それよか上の喫茶店でカツミートが食いたい気分。それでいいならおごってやるよ」

「わあい！さすが健ちゃん太っ腹！あたしの十倍、お小遣いもらってるだけあるねえ」

「おまえんところ、月三千円っていったもんな。おばさん、相変わらずケチケチしてんの？」

あたしたちは螺旋階段を上り、駅のビルの二階を目指した。ここには若者向けのジャンクファッションの店やら、ゲームセンターやら、ちょっと暗い雰囲気、あやしい感じのする喫茶店やらが入っていて、S市の十代、二十代のカップルが、デートコースとしてよく利用するらしい……なんともダサい感じではあるけど、それだけ田舎なんだからしょうがない。

その日、あたしと健ちゃんは、カツミートとオムレツを食べて、ゲーセンで遊んで、期待していたわりにはあまり面白くなかった映画を一本見て、雨の中、相合傘をして帰ってきた……なんとも高校生らしいおつきあい、だとわたしは思う。特別気分が盛り上がった時にキスしたりすることはたまにあるけど（あと、健ちゃんがやたらしつこい時だけ）、いわゆるBとかCとかいうのはなし。そしてあたしはそういう、友達とあまり変わりばえのしない健ちゃんとの関係が大好きだったけど——時々彼の瞳やちょっとした表情の中に、彼がそれだけでは満足していないらしいということは、敏感に感じとっていた。「俺ってマジ、よっきゅんだぜ」というのが、近ごろの健ちゃんの口癖で、あたしはといえば「そんなに欲求不満なら、バッティングセンターにでもいく？」とかなんとか、茶化してごまかしている始末……この手のことに関して、一番痛いのが、相談相手が誰もいないということだった。親友の美紀やさつきも、いわゆる真面目な優等生タイプで——今はそれぞれ自分の志望大学に向けて、受験準備の勉強を塾でしているところだった。そんなくならないことで悩んでいる暇があったら勉強、勉強というわけだ。それであたしは

結局、巧くんに宛てて悩み相談の手紙を書いた——もちろん、投函することのない手紙として書いているわけなんだけど、それでも一度文章にしてみると、見えてくることって、結構あるものだ。

まず第一に、あたしが健ちゃんに対して性欲を何も感じないということ……それよりもむしろ、そういう意味でなら、巧くんのほうに惹かれていると言ってもいい。一度、彼が買物へいっている間に、部屋を少し掃除しておこうと思った時、健ちゃんと同じようにエッチな漫画の本を偶然発見してしまったことがある。（へえ、巧くんでもこういうの読むのねえ）と思ったあたしは、好奇心からパラパラめくってしまったわけだけ——それはいわゆる使用済みという代物だった。エッチなシーンのページに、いくつか精液が飛び散っている箇所があったりして、そのことにあんまりびっくりしたあたしは——それまでに片づけたところも、また元どおりぐちゃぐちゃにして、どこにも、なんにも触れなかったという涼しい顔をしながら、巧くんが戻ってくるのを待った。その時に感じたドキドキした気持ち、それがあたしにとって、これまで経験した中で一番性欲というものに近い感情だった。

たとえばもし——健ちゃんが冗談半分に「やらせろ」とか「犯すぞ」とか言ったとしたら、あたしは「ばあか」とか「やらしいわねえ、もう」と言って茶化すかごまかすかするだろう。それでその話はそれきり終わり。それがいつものパターンだった。でももし巧くんに同じことを言われたとしたら——話はまるで別だった。たとえば、もし巧くんが（これはあまりにもありえない想像ではあったけど）「お願いだからちえみ、やらせてくれ」と懇願したとしたら、あたしはおそらく、彼の言うとおりにしてしまうに違いなかった！

……これは一体、どういうことなんだろう？

当時の幼い感情を綴った日記帳には、こんなふうには書き記されている。『あたしは健ちゃんのが好き。でも巧くんのこと、別の意味で同じくらい好きらしい……健ちゃんとの関係は先が見えないけれど、巧くんとなら、はっきりとした関係をイメージできる。美紀もさつきも同じ、東京の大学を目指しているけれど、あたしも健ちゃんではなく、巧くんが彼氏だったら、まったく同じ道を選んでいただろう。巧くんとなら、結婚して彼の子供を生んだり……ということに何故か不思議と全然違和感を感じない。にも関わらず、これが健ちゃんが相手ということになると、これから何年かつきあっても、もしかしたら別れることになるかもしれないし、結婚しても離婚するかも……そしたら子供を引きとってシングルマザー？なんていう可能性を、頭の隅のほうでどうしても考えてしまう。もし巧くんに相談できるなら、気休めでもいいから「考えすぎだよ」と笑って言ってほしかった。でも健ちゃんには絶対に何も言えない。これがもし、巧くんなら……』

（——これがもし、巧くんなら）

この日記帳はもう燃やしてしまったが、どちらかと言えば、健ちゃんよりも多く巧くんの名前がでてきていた記憶がある。あれから十年の月日が流れ、健ちゃんが死んでしまった今も、あたしには答えることはできない。健ちゃんと巧くん、本当はどちらの幼なじみのことを、異性として好きだったのかと。

第6章

あたしはその後、保育過程のある短大に推薦で合格し、健ちゃんは前々から宣言していたとおり、卒業後は一人前のタイル職人となるべく、知りあいのいる『高橋タイル工務店』というところに就職が内定していた。

あたしや健ちゃんの通っていた高校は進学校だったので、三年の終わり頃ともなると、受験ムード一色に染まっていたが、あたしたちは美紀やさつき、その他受験組のクラスメートのことを励ましつつも、日曜日にはデートを楽しみ、いつもながらの変わりばえのしない日々を送っていた。それでもひとつだけ——変わったことはあった。相変わらずキス以上の関係にはなかったものの、あたしが短大を卒業して保母さんになり、健ちゃんが一人前のタイル職人になったとしたら——結婚しようという約束をしたのだ。高校三年のクリスマスに。

「俺は結婚したら、絶対浮気はしない。もちろん今だってする気はないけどさ。それでちえみかもし——結婚するまで体を許してくれないっていうんなら、べつにそれでもいいよ。でも絶対に、俺以外の男にヴァージンはやらないって、約束してくれないか？」

ホワイトクリスマスの夜、なかなかロマンチックに過ごしたあとで、とどめとばかりにそう言われたら——どんな女の子だって、結婚まで待たなくても、今ここで……そうなってしまってもいいかもしれないって思うに違いない。もちろんあたしだって、心がまったく揺れなかったわけではないけれど——やっぱりもっと現実的に、一步後ろに引いた視点から、自分たちの将来について眺めていた。

「健ちゃん、そう言ってくれてすごく嬉しい。でもね、あたしが短大を卒業するまでの二年の間に——何があるかわからないじゃない？健ちゃんにもし、あたしの他に好きな人ができたとしたら、あたしは健ちゃんとその人がそうなるでも仕方ないと思うの。もちろん健ちゃんのことは信じてるし、自分が他の人とそういう関係になるだなんて、想像もつかないけど……でも約束してほしいの。あたしとの約束を守るために嘘ついたりとか、絶対してほしくないから。そのかわりあたしも、健ちゃんとの約束は何があっても絶対に守る。健ちゃん以外の男の人に……ヴァージンをあげたりしないって」

あたしのこの言葉に、性格がとても真っすぐな健ちゃんはどことなく不服そうだったけど、互いに必ず約束を守るというしるしにキスをして、その夜、あたしたちは雪の中を別れた。

年が改まった一月の中頃、健ちゃんとあたしを驚かす、サプライズニュースが飛びこんできた。巧くんが、某文芸誌の新人賞を獲得したのだ。あたしは新聞の片隅に小さく載っていた記事を見て、善は急げとばかり健ちゃんに電話した——のだけれど、相手は話中だった。でもすぐにまた健ちゃんから電話がかかってきて、今巧と話してたんだけど、聞いて驚くなよ、と彼は息せききってまくしたてた。

「な、な、な、南斗水鳥拳じゃなくて、巧のやつ、ミステリー小説で賞とったんだってさ！すげえよ。さすが俺の兄貴って感じ？」

「えーっ、おめでとう！」と、あたしは新聞でたった今読んだとは言わずに、健ちゃんと祝福を分かちあった。「きっといつかはって思ってたけど、こんなに早くその時がくるとは思わなか

った。さすが、あたしの幼なじみって感じ？」

あたしたちはそのあと、笑いながら陽気に昔あったことなんかを話し、巧くに小さな頃影響を与えた作家や漫画家の話や、そういえば昔から巧くんにはストーリーテリングの才能があったことなんかを長々としゃべりあった。

「ほんと、すげえ嬉しいよ。俺はこう見えても、結構現実的なタイプだけど、巧は一生夢を追って生きるっていうタイプの男だからな。夢のためなら六畳一間の部屋で貧乏もいとわず来る日も来る日も売れない原稿を……なんてことにならなくて、本当によかったよ」

「どうしよう、あたし……巧くに電話したほうがいいと思う？それとも電報とかのほうが嬉しいかなあ」

「何いってんだよ。直接電話しろよ。今電話番号教えてやるから」

そのあとあたしは興奮しながら東京の巧くんのアパートに電話をし、短い間、少しだけ話をした。巧くんは思ったよりもずっと落ち着いていて——はっきり言って、声を聞いたかぎりでは、いつもと全然変わりがなかった。

「うん、ありがとう。俺も、ちえみにそう言ってもらえるのが、一番嬉しいよ」

謙虚な彼は、賞をとったといっても、やっとスタートラインに立ったというだけのものだし、問題はこれからだ、というようなことを言っていた。まるで、賞など取ったのは当たり前で、自分はまだアルプス登山の麓によく辿り着いたにすぎない、とでもいうかのように。

「作家っていうのには、色々タイプがあると思うんだ。最初から完成されている作家もいれば、まぐれ当たりの一発屋だっているし、長い作家生活の中で、当たりと外れを半々ずつ書いているような作家だっているだろう？俺は小説家としてはまだ完成されたスタイルを十分に持っているとはいえないけど——少なくとも無駄なものは一字も書きたくないと思ってる。とりあえず今は二作目にとりかかっているんだけど、自分ではこっちの作品のほうが受賞作よりいい出来だと思ってるんだ。大抵の作家は二作目で叩かれるらしいから、そうならないことを祈ってるよ」

巧くんは最後に、近いうちに実家に帰る予定でいるから、そうしたらゆっくり会って話をしようと言って、電話を切った。そしてあたしは電話を切るのと同時に、何故か溜息を着いた——巧くんが自分の夢を叶えることができたのはとても嬉しい。でもどこか、彼が遠くへ行ってしまったような気がして、寂しい気持ちになったのも確かだった。

(……あたしには、一体なにができるだろう？)

電話の向こうの巧くんの声は、あたしが今まで聞いたことのない声質のものだった。自分の夢に熱中していて、またその夢に対して確かな手応えを感じている男の人の声だった。考えてみれば健ちゃんも、自分は昔からタイル職人になるよう決められていたかのような口ぶりで、自分の将来について語ることがある。でもその確信って、一体どこからくるものなんだろう？

「変な意味じゃないけど、さなぎからいまだに変態できていないのって、わたしだけなのかなあ……」

あたしは自分の部屋の、ベッドの上に立つと、そこにかかっている大好きなアニメのカレンダーと、マジックを手にして向きあった。そして巧くんが近いうち、と言った予定の日——一月三十一から二月の七日にかけて、花丸模様のしるしをつけた。若干前後するかもしれないけれど、

大体この間に帰省する予定だと、彼は言っていたから。

でも巧くんが実際に帰ってきたのは、二月の四日から七日までの、たったの四日間だけで、その上中学時代の恩師やら高校時代のクラスメートやらと会うのに忙しく、あたしや健ちゃんと彼がゆっくりできたのは、最後の六日の夜だけだった。そして巧くんの運転する中古のシビックに乗って海辺の道をドライブしていた時——彼らは交通事故にあった。ちょうど、三人でイタリア料理店で食事をし、あたしが家まで送ってもらい、車から降りた直後のことだった。

その白のシビックは、巧くんがミステリー賞の賞金で購入したばかりのもので、彼は仮免に受かったばかりの健ちゃんと、運転を交代して——海辺沿いの隣町までいく予定だったらしい。ところが、あとから巧くん聞いた話によると、片側が海、片側が山の切り立った斜面になっている道路で、突然何かよくわからない生き物が飛びだしてきた、ということだった。咄嗟に健ちゃんはハンドルを切り、対向車線にはみだした車は、向こうからやってきたダンプカーと正面衝突した。

ダンプカーの運転手は幸い軽症ですんだけど、巧くんは意識不明の重体で、ハンドルを握っていた健ちゃんに至っては、即死だった。

その日の夜遅く、電話で事故の知らせを聞いたあたしがどんな気持ちになったか、それは十年たった今でも、とても言い表すことはできない。健ちゃんのお母さんは昔からのキンキン声で、涙ながらに『それでも、ちえみちゃんが乗っていなかったことだけが、不幸中の幸いだった』と言った。でもあたしには——とてもそうは思えなかった。健ちゃんの死の知らせを聞いた時、その瞬間からあたしの心の中の一部もまた、凍りついたように死んでしまったからだ。

けれども、あたしはおばさんとの電話の最中には、涙一粒こぼさなかった。何故かといえば、まだ全然実感がわいてこなかったからだ。こうしたことはすべて、質の悪い冗談か何かで、明日の朝には「健ちゃんが死んだ夢を見た」と言って、彼と笑いあえそうな気さえしていた。でも実際には、翌日の朝には健ちゃんの死は揺るぎのない現実として、あたしの存在の上にその輪郭を確かなものにした。

あたしは健ちゃんの家で、白い布団の上に横たわった彼と面会し——白絹のハンカチがさっと彼の顔からよけられた時、初めて健ちゃんの死を実感して号泣した。

健ちゃんは、ダンプカーと正面衝突したというのが信じられないくらい、外傷というものがほとんどなく、顔もとても綺麗だった。こんな綺麗な顔をした男の子には会ったことがないとさえあたしは思った。彼は半分は確かにわたしのよく知っている幼なじみの健ちゃんだったけど、もう半分は死によって神聖さがその横顔に加わって、どこか見知らぬ人のようにさえ感じられた——ただ、首の骨を折ったということで、よく見ると首のまわりには二重に歪んだような赤い痕が残っていた。あたしは一度涙がおさまった時に、その首の赤くなった二本の筋を見て、再び涙が目の奥からあふれてくるのを止められなくなった。

おばさんは打ちひしがれた様子で、目のまわりを真っ赤に泣きはらしていたが、義理の父であるおじさんに至ってはもっと——ある意味ではおばさん以上に、痛々しい感じだった。それに比べたら、実のお父さんのほうは、義理で参列した赤の他人のようにさえ見えた。もちろん健ちゃ

んのお葬式が行われようとしている今この瞬間にも、巧くんは総合病院にある集中治療室で生死の境をさまよっており、おじさんにしてみればもはや——言葉も、顔に浮かべる表情も何も、なかったのかもしれない。

告別式が終わった時、義理の父であった黒木さんは、とても感動的な弔辞を読みあげた。おじさんは決して綺麗な言葉でなど語らず、日常にあった自分と義理の息子との間の確執について語り、また喧嘩ばかりしていたことも包み隠さず語った。そして最後にしかし、とおじさんは涙を拭いながら言ったのだ。その言葉をあたしは今も、忘れることができずにいる。

「しかし、わたしは健くんのことが好きでした。彼にとってわたしは、説教ばかりする、ただの煙たい親父でしかなかったでしょう。あるいはもしかしたら、お母さんの愛情を奪った、憎い存在でしかなかったかもしれない。でもわたしは——喧嘩ばかりしながらも、彼のことを心のどこかで尊敬していたような気がします。もっとも、日常会話にでてくる言葉は、お互いにひどいものばかりではありましたが、彼は本当に心が綺麗で真っすぐで曲がった大人、汚い大人のすることが許せなかったのだという気がしてなりません。ここにこうしてお見送りくださった皆様方も、健くんのそうした気質をよくご存じのことと思います。都合のいいことを言うようですが、わたしは——彼がこれから結婚したり、可愛い孫が生まれたりということを、本当に楽しみにしていたのです……」

わたしが黒木のおじさんの弔辞を今も忘れられないのはもしかしたら、この時おじさんがちらとわたしのほうを見たせいなのかもしれない。今でもわたしは時々、この瞬間のおじさんの哀切な、何かに訴えるような眼差しを何かの拍子に思い出すことがある。

『結婚したり、可愛い孫が生まれたり……』

きっとおじさんは、その時には結婚祝いにどんなことをしてくれたりするか、可愛い孫を見た時には、どんな顔をしたろうか、随分あとになってから、そんなふうに想像しては、あたしはとても切なくなった。その時にはきっと、健ちゃんもおじさんも喧嘩なんてすることなしに、仲のいい義理の父と息子になれていたかもしれないのに。

健ちゃんのお葬式が済んで、一段落したあと、あたしは巧くんの入院している病院までお見舞いにいった。本当は事故の知らせを受けたあと、すぐにでも駆けつけたかったのだけれど、おばさんから「今いってもどうにもならない」と言われ、「とりあえず健のお葬式がすんでからのほうがいい」と忠告されたためだった。

実際、病院の待合室では随分長いこと待たされたあとで——看護婦さんの話によると、ちょうど処置中だということだった——マスクをしたり、白い割烹着のようなものを着たり、頭に薄い水色の帽子のようなものをかぶり、さらに手を消毒したあとで、ようやく、巧くんに会えた。けれども、面会できたのもほんの十五分かそこらで、すぐに看護婦さんから「もうそろそろ……」ということを言われた。

巧くんのお父さんも一緒だったが、おじさんは健ちゃんのお葬式では一粒も涙をこぼさなかったのに、ICUや待合室では祈るように手を組み合わせ、陽に焼けた黒い頬に、涙を滂沱と流していた。

あたしも、人工呼吸器やたくさんの点滴の管にとり囲まれた巧くんを見て、思わしくないもの

を感じて愕然としてはいたものの、ICUをでた時には思わず、腹が立って、おじさんにこう怒鳴り散らしていた。

「おじさん、巧くんは絶対によくなりますから、そんなふうに泣かないでください。そんなことしたら、巧くんがもうこの世にいないみたいじゃないですか」

おじさんは「うん、そうだな。ちえみちゃんの言うとおりで」などと言って、手の甲で涙を拭いていたが、あたしが言いたかったのは本当は、まったく別のことだった——「おじさん、ひどいじゃないですか。健ちゃんのお葬式では涙ひとつ見せなかったのに、この差は一体どういうことなんですか。健ちゃんが本当はおじさんの子供じゃないって、本当なんですか？もしそうだとしたら、何を根拠におじさんはそんなことを、健ちゃんの前で言ったりしたんですか」

それはもしかしたら、完全に八つあたり、だったかもしれない。健ちゃんを喪ったことに対する、どうしようもない哀しみと怒り……大切な、かけがえのない人を失った時、怒りという感情は悲しみとは程遠いと考える人もいるに違いないけれど——あたしは巧くんのことをお見舞いにいって、こみあげる哀しみと同時に何故か突き上げる怒りを感じた。それは、何故仮免に受かったばかりの健ちゃんと運転を代わったりしたのかとか、そういうことではまったくなく——心のどこから溢れてくるのかわからない、世の中の不条理というものに対する怒りだった。

あたしは次の日も、またその次の日も、巧くんのことをお見舞いにいった。何故なのかはよくわからないけれど、巧くんはあたしがいくと必ず「処置中」で、いつも長く待合室で待たされた。しかも、それでいながら面会できる時間はたったの十五分程度……あたしは毎日、巧くんが助かるようにと神さまに祈っていたけれど、祈りながらもいつも怒りを感じ続けていた。何故、健ちゃんは死んでしまったのかという、神さまに対する愚痴や文句を抱えながらも、それにも関わらず巧くんのことを助けてくださいと祈らずにはいられない矛盾……そうした矛盾に対して、あたしはひどく腹を立てていた。時には怒りのあまり、祈りながら目尻から涙が溢れてしまうほど。

果たして、あたしの祈りが聞き届けられたのかどうか、看護スタッフのよくいき届いた看護と処置のためか、それとも巧くん自身の生命力の賜物によるものか、彼は一か月後に奇跡的に意識をとり戻し、その二週間後には集中治療室から一般病棟に移れるほどに、容体が回復していた。

ただし、巧くんには事故の前後の記憶がまったくなく——医師からは、まだ弟さんの死や、交通事故の詳細については伏せておくよう、重々注意されていた。巧くんは、自分が小説で賞をとったことさえ忘れており、そのことを話すと「夢みたいだ」と、子供のように笑って言った。

「なんだか、変な感じがするよ。これを自分が書いただなんて、とても信じられない……なんだか、他人の書いたものを読んでいるようにしか感じられないんだ」

巧くんは、『殺意のセラフィム』という彼の書いた処女小説をテーブルの上に置き、斜めに持ち上げたベッドの背にもたれていた。

あたしは毎日、巧くんの口から健ちゃんの名前がでるたびにぎくりとしながらも、おじさんやおばさんたちとあらかじめ打ち合わせていたとおりに——健ちゃんはタイル職人の修行のために、今遠く離れたU市のほうで頑張っているという話にそって、適当にごまかしていた。いつか巧く

ん自身に記憶が戻ったらどうなるのだろうと怯えながら……。

「ちえみ、短大にいくのをやめて、今ウェイトレスのバイトしてるんだって？じゃあ、卒業するまでと言わず、健がタイル職人として一人前になったら、結婚できるわけだ。そういうことならまあ、健も頑張り甲斐があるよなあ。羨ましいよ、本当に」

「なに言って……なに言ってるの、巧くん」と、あたしは林檎の皮を剥きながら、ためらうような口振りで言った。「結婚なんてそんな……まだずっと先の話よ。ずっとずっとずううっと、先の話」

「先の話か。でも健は早く結婚したがるだろ。あいつ、ちえみが四年制の大学じゃなくて、短大を受けるって聞いて、喜んでたからなあ。女子大なら、変な虫がつく心配がないって」

「健ちゃんの考えすぎじゃない？あたし、そんなに男の人にもてるほど、美人でもなければ特別可愛いっていうわけでもないし」

あたしは林檎をおろし器ですりおろすと、お皿に入れて、スプーンを添えた。そしてテーブルの上、巧くんの前に差し出した。

「おお、サンキュ。これぞ病人食」

——奇妙なことだけれど、意識が戻り、ICUから出てきた巧くんは、どこことなく物言いが、健ちゃんに似ていた。顔つきにしても、なんというのだろう、前はこんなふうじゃなかったような気がするというか、死んだ時の健ちゃんの神聖な面差しが半分乗り移ったような感じというか……時々、そんなふうに感じるものがあって、あたしは涙をこらえきれなくなりそうになると、急いで廊下を走って行ってトイレに駆けこんでいた。

集中治療室での、意識が戻るまでの一か月間は恐ろしく長く感じられ、巧くんはこのまま目を覚ますことなく死んでしまうんじゃないかと、あたしは正直何度も不安に思った。けれども、一度意識が戻ると、巧くんの病状はみるみる回復し、今は寝たきりの間に衰えてしまった筋肉を鍛えるために、リハビリに精をだしている。事故にあった時に頭蓋骨を挫傷したということで、頭は暫くの間丸坊主だったけど——彼はよく自分の頭を撫でながら「このくらいですんでよかった」と口癖のように言った。「もしかしたら、もっと悪いことになっていた可能性だってあるのだから」と。

第7章

「いやあ、やっぱり若い人の回復力っていうのは凄いなあ」

回診にきた佐久間先生は、ベッドから起き上がって、食卓テーブルの上のワープロと向きあっている巧くんに、何度も頷いて感心していた。

入院してから三か月もすると、手術した巧くんの頭の傷痕は見えなくなり、短い黒い髪の毛が生え揃っていった。リハビリのほうも順調で、先生方が思っていたよりも早く、車椅子も松葉杖もなしで歩けるようにもなっていた。

「そりゃそうですよ」と、主治医の医師やら研修医やら、また婦長さんや看護婦さんやソーシャルワーカーの人やらに囲まれつつ、巧くんは屈託なく笑っている。「俺がこうなって一番嫌だったのが、自力でトイレにいけないことでしたからね。とにかく、看護婦さんの手を早く煩わせないようにになりたいという一心で、リハビリに励んだようなもんですよ」

「ああ、でも出雲さんには……」と、まだ年若い巧くんの主治医は、クリーム色のカーテンに隠れるように佇むあたしのほうへ、ちらと意味ありげな視線を投げた。「看護婦以上に、彼女の存在のほうが大きかったんじゃないですか？前途有望な作家と、美しい妻……将来のために、ちょうどいい予行演習になったように思いますけどね、僕は」

これだから回診の時に居合わせるのは嫌なのよ、と思いつつ、あたしはむっつりした顔で、押し黙ったままでいた。あたしからなんの言葉も発せられないのを見て、巧くんがフォローにまわる。

「先生、前にも言ったじゃないですか。ちえみは弟の恋人なんです。いってみれば、将来の義理の妹ってとこですね。それじゃあ、来週には退院できるっていうことで、あと一週間ほど、お世話になります」

「執筆活動、がんばってくださいね」

巧くんが看護スタッフに向かって頭を下げると、マシュマロみたいに優しい印象の残る太った看護婦が、そう最後に声をかけた。

佐久間医師を筆頭にして全部で七人ほどの人間がぞろぞろと部屋をでていき、カルテを乗せたカートが、それに続く……ソーシャルワーカーの三宅さんは、最後にひとり残ると来週の退院について、その手続きのことなどを軽く説明してから、隣の病室へと移っていった。

「退院おめでとう、巧くん」

あたしは誰もいなくなった個室で、ほっと溜息を着いてから、ベッドの脇のパイプ椅子に座った。そして彼が二作目の小説として上梓する予定の、『ヘリオトロープホテル』という、ロンドンにある（架空の）ホテルで起こった、密室殺人の謎に挑むべく、印刷されたばかりの原稿を再び手にした。

「まだ本当に退院したってわけじゃないさ」

巧くんはワープロに向かってパタパタ、と素早いタッチでどんどん文字を打ちこんでいる。彼の言うとおりの、頭の中にできあがっているものを、後はもう脳の回線を通して移植するだけという、いかにもそんな感じだった。

「予定は未定であって、決定ではないってね。まあ、それでもたぶん、来週の水曜日には退院で

きるだろうな。そうしたらロンドンへ小旅行して、自分の書いたことが確かに間違っていないかどうかチェックリストを手に調べにいかないとな」

「うん、あたしも読んでて凄いと思った。イギリスの地理とか鉄道の路線とか、向こうの文化とか習慣とか……イギリスについて本だけたくさん読んだだけじゃあ、ここまではとても書けないと思うんだ。出雲健一郎って、ワールドワイドに活躍する探偵なんだね」

「そうだね。これからも世界各国を舞台に、難事件を次から次へと解決する予定……なのもいいとしても、ちえみ、俺が来週退院したらそのあと——一緒にロンドンへいかないか？」

巧くんは、相変わらずワープロと向きあったまま、顔色ひとつ変えるでもなく、眉ひとつ動かさずに、なんでもないことのようにそう言った。

「巧くん、何いって……」

あたしはパイプ椅子を思わず後ろへ引いた。ギィ、と床の擦れる、嫌な音がする。

「やっぱり無理、だよな。健を裏切ることは、ちえみにはできないもんね」

ワープロから目を上げた巧くと、あたしは暫くの間、見つめあったままでいた。言葉でなんて直接言われなくても、眼差しだけでわかる。愛している、と彼は言っていた。

「ちえみ……」

あたしは原稿の束をベッドの上に放りだすと、いたたまれない気持ちになって、そのまま巧くんの病室から外へでた。そして回診が終わったばかりの、佐久間先生と廊下でぶつかりそうになった。

「すみません」

あたしは小さく頭を下げると、先生の脇をすり抜けて、走っていこうとした。でも先生は毛深い、浅黒い手であたしの腕を引きとめると、どこか秘密めいた小さな声で、

「実は話があるんですよ」とわたしの耳元に囁いた。

「もしよかったら、今から少しお時間いただけませんか？」

ナースステーションの脇にある医務室で——ここは、先生方が入院している患者や患者の家族などに、病状や手術の経過などを説明したりする部屋だった——佐久間先生は読影台にかかったレントゲン写真などを机の脇に片付けると、あたしに椅子に座るよう勧めた。

「外科医っていうのは基本的に、体の傷を治したらハイさよならっていう存在ではあるんですがね」

先生は鼈甲縁の眼鏡をティッシュで磨くと、机に片腕をもたせかけた姿勢で、あたしのほうを振り返った。なんだか、これからガンを宣告される患者と医者 of 凶といったような感じだった。

「出雲さんの場合は、極めて特殊なケースだと思うんですよ。精神的な意味合いでね——僕も脳外科医になって七年になりますが、頭の打ちどころが悪くて記憶を失くしたというケースは、出雲さんが初めてというわけじゃありません。乗っていた船が転覆して、奇跡的に助かった人が体の傷が全部回復してのち家族に会ったところ、まるで家族のことを思いだせないという、そういうこともありました……その方は自分のしていた仕事や職場の同僚のことはよく覚えているのに、家族のことがまるで思いだせないんですよ。その患者さんは航海士をしておられたので、航海

のたびに何年も家を空けることも珍しくなかったという話ですから、そういうせいもあったんでしょうが——今も、家族との昔の記憶は思いだせないながらも、奥さんや娘さんや息子さんと、仲よく暮らしているそうです。出雲さんももしかしたら、これからもずっと交通事故にあった時の記憶は失ったままかもしれない。でも弟さんのことはいずれ、誰かが真実をお話しなくてはならないでしょう？その時、どうしても支えになる人が必要だと思うんですよ。ちえみさんは出雲さんの弟さんの恋人だったということですが……すみません、立ち入ったことを言ってもいいですか？」

構いません、という意思表示に、あたしは小さく頷いた。

「僕には、あなたが出雲さんの恋人のように見えて仕方がない。彼に聞いたところ、ちえみさんは幼なじみということでしたから、最初はそのせいかなのと思ったんですが、僕の勘が間違っていないければ——あなたたちふたりはお互いを想いあっている、そうじゃありませんか？」

そうです、とも、そんなことはありませんとも、あたしには何も言えなかった。それでずっと顔を上げずに、俯いたままでいた。

佐久間先生は耳にはっきり聞こえるほどの、重い溜息を着いている。

「ちえみさんの、苦しい気持ちとつらい立場はわかります。でも真実を告げる時、できるなら彼の力になってあげてくれませんか？それができるのは、たぶんあなたひとりという気がするので……出雲さんが一般病棟に移ってから間もなくして、お母さんがお見舞いにいらっしゃったでしょう？いつもは冷静沈着な彼が、お母さんに向かっては『帰れ！』と怒鳴って暴れだした。そういうことを考えあわせると、頼めるのはあなたひとりという気がするんですよ」

——お母さんが涙ながらに病室に入ってきた時、巧くんは点滴の針をすべて引き抜くと、まだ不自由な体であったにも関わらず、そこいら中のものを彼女に投げつけ、ありったけの罵詈雑言を浴びせかけて、お母さんのことを追いだしたのだ。

『出ていけ、出ていけ！この淫売！俺の物に何ひとつ触るんじゃない！半径一メートル以内に絶対近づくな！この因業ババア！』

その場にいたあたしは、巧くんが精神錯乱を起こしたのではないかと思ったほどだったが、彼はあくまで正気だった。先生は廊下で泣きじゃくるお母さんに向かって『息子さんはまだ病状が安定していない』といったようなことを話していたけど、巧くんは看護婦さんに点滴針を交換してもらったあとで——『もう絶対、二度と会いたくないんだ、あんな女』と、押し殺したような声ではっきりとそう言っていた。

あたしは先生との話を終えて医務室をでると、頭の中の考えがまとまらないままに、巧くんの病室に戻った。自分のずるい考えを言葉にして巧くんに伝えるには、まだもう少し時間が必要だったので、少なくとも巧くんが退院する来週までに——自分の気持ちを彼に伝えるつもりだった。そして巧くんが『健のことはどうするのか』と聞いたら、真実を話そうと思った。これからふたりでその真実の重みに耐えていこう、と。

病室には巧くんの姿はなく、ワープロのディスプレイも閉じられていた。ベッドの、彼の座っていた箇所が、軽く窪んでシーツに跡を残している……売店にでも買物にいったのだろうかと思い、あたしはトートバッグを手にとると、時計に目をやり、少し早いけど帰ろうと思った。今日はお昼の一時から夜の八時まで、ウェイトレスのバイトが入っている。そのことは朝、巧くん

にも伝えておいたので、何も言わずに帰っても、彼はわかってくれるだろうと思った。

喫茶店のアルバイトは、とても楽しかった。お客さんの注文をとったり、コーヒーやパフェやスパゲッティのお皿などを運んだりしている間は、仕事に集中していて、何も考えずにいられた。そして仕事が終わったあとの、肉体を酷使した充実感……あたしはそれがとても好きだった。マスターやお店の他のスタッフとも、とてもよい呼吸で仕事をするのができていたし、顔なじみのお客さんもだんだん増えてきた。

(これでもし、健ちゃんが生きていたら……)とあたしは考えた。たぶんあたしは、健ちゃんと結婚することに、なんの疑問も感じることなく、ウェイトレスのアルバイトをずっと続けていたかもしれない。巧くんは作家になって、どこか異郷の遠い存在として感じ、彼にはきっと東京のほうにいい人がいるに違いないと、そんなふうに想像していただろう。でも、あの交通事故によって健ちゃんは死んでしまい、その後のすべても変わってしまった。アルバイトの前か後に病院へいくことが、ここ三か月間の、あたしの唯一の生き甲斐で、それがなくなってしまったらあたしは——一体何を支えにして生きていけばいいのかわからなかった。

佐久間先生と話をしたことによって、あたしは自分のずるい考えを正当化した。つまり彼にはこう言えばいいのだ。健ちゃんにつきあっている時からすでに、自分は巧くんのほうに惹かれていたと。今こうなって初めて、自分の本当の気持ちに気づいたのだと……彼のほうでも決してそれを嘘とは思えない。そしてわたしの中でもそのことは間違いではなかったし、巧くんが交通事故にあって意識不明になってからというもの——健ちゃんに対する想いとは別のところで、巧くんに対する想いというのは日毎に、だんだんと大きく重くなっていったのだ。もし、健ちゃんが一人前のタイル職人となるべく遠く離れたU市に……という話が本当で、その間に帰省していた巧くんがひとりで事故にあっていたら……そしてわたしがその看病やお見舞いのために毎日病院に通っていたとしたら、それでもやっぱりわたしは巧くんへの想いに気づいていたんじゃないかという気がした。

(ごめんね、健ちゃん。でもあたし、健ちゃんがいなかったら、ひとりでなんて生きていけないの。巧くんのごことは、健ちゃんのかわりっていうわけじゃなく……自然に普通に愛しているって、そう思えるの)

あたしにはわかっていた——今、この瞬間にも病院のベッドの上で、巧くんが自分と同じ気持ちでいるだろうことが。わたしと巧くんの想いの違いはただひとつだけ。健ちゃんが生きてるか、死んでいるか……そして生きていると思っている巧くんのほうが、重い罪悪感のようなものを引きずっているに違いなかった。もしかしたら、真実を話した瞬間に、巧くんのわたしへの愛はすっと醒めて消滅してしまうかもしれない。でも、それでもいい。これ以上嘘をつき続けて、健ちゃんが生きているという振りをするよりは……怒鳴られても、憎まれても、軽蔑されてもいいから、巧くんにすべてを決めてほしかった。

第8章

次の日、みかんと白桃の缶詰の入った買物袋を下げ、あたしはいつものように病院のエレベーターを八階へと上がっていった。そしてナースステーションの前を通りすぎ、廊下の突きあたりから三つ手前の808号室のドアをノックした。返事が返ってくるのを待ってみたけれど、中からは何か、衣類のかさばるような物音が聞こえるばかりだった。

「？」

べつに特に取りこみ中ということもないだろうと思ったあたしは、そっと扉を横に押し、「巧くん、いるの？」

と、クリーム色のカーテンの向こう側に声をかけた。するとそこでは看護助手の若い女性が、ひとりでベッドカバーやシーツの交換をしているところで——顔を真っ赤にしなが、緑色のラバーシーツをベッドの下へぐいぐい押しこんでいた。

「あの、もしかして巧く……いえ、出雲さん、病室変わったんですか？」

ベッドの上のネームプレートも、その他床頭台の上にあったものも何もかも、一切が片付けられているのを見て、あたしは薄いピンク色の制服を着た看護助手の女性にそう聞いた。

「いえ、出雲さんは午前中のうちに退院なさったんです」

いかにも事務的な調子で答え、彼女は枕を枕カバーの中へと押しやりながら、ぶつぶつ独り言を言うように続けた。

「今日これから新しく入院患者さんが見えるのでね、他の病室はみんな埋まってますから、とりあえず個室に入ってもらうことになってるんですよ。それじゃなくても朝から交通事故の急患やらが入って、こっちは大忙し。シーツ交換なんて、いつもはふたり一組でぱぱとやっちゃうんですけど、こう忙しいと人手が足りなくて……あっ、もしかしてあなた川原さんですか？」

彼女は忙殺されるあまり、すっかり失念していた、というように、掛け布団を包布にくるみ終わると、後ろのあたしのことを振り返った。

「ちょっとここで待っててください。今、ソーシャルワーカーの三宅さんと呼んできますから」

一体なにがどうなってるんだろうと、狐につままれたような気持ちで、あたしは看護助手の女の子を見送った。年はたぶん、あたしと同じくらいか、ひとつかふたつ年上ってところだろう。ここのシーツ交換が終わったら、やるべき仕事が詰まっているのかどうか、「ああ、忙しい忙しい」とぶつぶつ呟きながら出ていった。

「ヨウコちゃん。そこ終わったら、二時に手術室まで搬送するの手伝ってねー」

「はい、わかってまーす」

「あ、ヨウコちゃん。あとからでいいんだけど、滅菌室からルンバールセット持ってきて。今朝の交通事故で三つ使っちゃったのよ」

さながら戦場のようだ、と思いつつ、あたしは看護助手のヨウコさんが戻ってくるのを待った。きっと彼女は看護婦からの信任の厚い看護助手で、みんなから可愛がられているのだろうと、廊下で交わされた会話から想像された。

「今、三宅さんこっちまでできますから、川原さんはここで待っていてくださいって言ってきましたよ」

突然退院だなんて、一体どういう……と、ヨウコさんという名の彼女に聞いてみたいとも思った。でも時刻は現在一時二十分。二時に手術のある患者さんを手術室まで搬送するのを手伝うということは……とあたしは考えて、彼女が使用済みのシーツ類を両手いっぱい抱えて部屋をあとにするのを、ただ黙って見送ることにした。

「ヨウコちゃん、今日もべっぴんさんだね」と、中年の男性患者から廊下で声をかけられているのが聞こえる。たぶん、隣の病室の片麻痺の患者さんだろうと思った。彼はよくそんなふうに、看護婦さんたちをからかっていたから。

「何寝ぼけたこと言ってんのよ、吉住さん。リハビリはもう終わったの？ナンパしてる暇あったら、とっとと退院してちょうだいよ。こちとら満員御礼なんだから」

ふたりが軽く笑いあっているのが聞こえ、あたしもなんとなく微笑んだ。ヨウコさんは容姿という点でいうなら、決してべっぴんさんとは言えなかったかもしれない。いつもノーメイクで、眉が薄く、鼻も低くて、やたら大きな口ではっきりと自分の言いたいことをずばずば言っているのが、よく聞こえていた。そしてそんな彼女は一般的な意味合いでは美人でなくても——吉住さんの言うとおりに、確かにべっぴんさんだと、あたしもそう思っていた。

「ごめんなさいね、お待たせして」

すらりと背の高い、お洒落な雰囲気美人の美人ソーシャルワーカー、三宅さんは手に持っていた薄紫色のファイルから、一通の細長くて白い封筒をとりだすと、無言でわたしに向かって差し出した。

「びっくりしたでしょう？突然退院だなんて」

三宅さんは当惑しているあたしに向かって、まずは座るよう、パイプ椅子を勧めた。そしてベッドを挟んで自分も椅子に腰かけると、どこか言いづらそうに、気遣わしげな眼差しを一瞬したあとで、話しはじめた。

「きのう、川原さんが帰ったあと——出雲さんね、病院のテラスから庭にでて、少し外を散歩なさってたの。あたしも、同僚とテラスでお昼ごはんを食べているところでね、たまたま彼の姿を見かけて、ちょっとお話でもしようかなと思って、あとをついていったの。あたし、出雲さんが作家だなんてつい最近になるまで全然知らなかったものだから、この間本屋さんで彼のデビュー作を急いで買って読んだのね。だから、その話でもしようかなって思ったの。出雲さんは庭の中央にある御影石の噴水のところに腰かけていたから、隣に座ってね、少しお話してたんだけど、そしたらとても綺麗な青い瞳をした黒猫が——プルシアンブルーっていうのかしらね——芝生を横切ってくるのが見えたの。それまで、あたしと出雲さんは小説の話をしてたんだけど、その猫がこっちに向かってやってくるなり突然様子が違ってしまってね、突然『やめろ、こっちへくるな！』って叫ぶなり、頭を抱えて倒れてしまって——あたしもすっかり度肝を抜かれてしまって、急いで病院のほうに戻ったわ。八階のナースステーションに電話をかけて、出雲さんが倒れたって言って、すぐに看護婦さんたちにきてもらったの……でも彼、あたしが走って戻った時には、すっかり気を取り戻していてね、大きなふてぶてしい顔をした黒猫を、抱きあげていたの」

三宅さんは何故かそこでふっと一度溜息を着いてから、伏せていた長い睫毛を上げて、あたし

のほうを見た。彼女のその視線であたしは、巧くんに記憶が戻ったのだと、そう直感した。自分が手の内に持っている手紙が震え、あたしは目尻に浮かんだ涙をブラウスの袖で拭いた。

「……それで、どうしたんですか？」

あたしは話の先を、三宅さんに促した。

「出雲さん、看護婦さんたちがやってきても、記憶が戻ったとは言わなかったわ。ただ突然具合が悪くなっただけだって……でもその日の夕方、退院したいって佐久間先生に言ったのね。先生にしてみれば、昼間のようなことがあった以上、最後に念のため、もう一度検査をって思ってたんじゃないかと思うんだけど、出雲さんは先生に記憶が戻ったことを話してね、あたしに今朝、この手紙をあなたに渡してくれって置いていったの。出雲さんが交通事故にあった時——突然動物が飛びだしてきたって話だったでしょう？出雲さん、あの大きな黒い野良猫の青い瞳を見た瞬間に、すべて思いだしたんですって。でも、車の前に飛びだしてきたのは——はっきり猫だったかどうか、そこのところはわからないって、言ってたわ。猫にしては大きすぎるのだけど、でも犬でもなくて、狐よりも大きい白いふさふさしたよくわからない獣が車の目の前に飛びだしてきて——それで弟さんは避けようとしてハンドルを切ったんですって。たとえるなら、大きなふさふさした青い目のペルシャ猫みたいに見えたってということなんだけど……記憶が戻ったきのあの夜、不思議な夢を見たともおっしゃってたわ。その白い猫が二本足で人間みたいに立って、人間の言葉でお礼を言いに来たんですって。『あの時は助けていただき、誠にありがとうございました。弟の健さんは天国で幸せに暮らしているので、何も心配いりませんよ』って……これも良心の呵責っていうやつなんだろうかって、出雲さんは苦笑してらしたけど……その夢は本当にふわふわふかふかした印象で、天国の匂いがして、出雲さんは『ああ本当に弟は天国にいるんだな』って、確信することができたって……」

話の途中で、あたしが啜り泣いてしまったので、三宅さんは窓辺にいるあたしのほうへ椅子を近づけ、慰めるように、そっと優しく肩を抱いた。

「そういったこともすべて、手紙には書いてあるけれど、ショックが大きいといけないから、少し話しておいてくれませんかって、最後に頼まれたの。あたしもそうだけど、先生方や看護婦さんたちもみんな——出雲さんと川原さんのこと、とてもいいカップルだってそんなふうに思っていたのよ。もちろんあたしは、他の職員にこのことを話したりするようなことは絶対にしないわ。川原さんもつらいでしょうけど——たぶん、出雲さんのほうがもっと……」

あたしは泣きじゃくりながら何度も頷き、そのことは痛いくらいよくわかっていると、心の中で繰り返した。三宅さんはポケットから水色の水玉模様のハンカチをとりだして、あたしに差しだしてくださったけど——あたしは首を振って、鞆の中からティッシュをとりだすと、それで鼻をかんだ。

「すみません。なんだか、取り乱してしまって……あたしなら大丈夫ですから、どうか、お仕事のほうに戻ってください。巧くんのこと、本当にありがとうございました」

三宅さんはちらと細い手首にかかった、ブレスレットのような時計に目をやると、

「ごめんなさいね、二時から面会の約束があるものだから」

そう言って、最後にあたしの肩に軽く手を置いてから、部屋を出ていった。ぱたん、と病室のドアが静かに閉まるのと同時に、あたしはさっきよりも一層激しく、ただし、声を押し殺して泣

きじゃくった。そしてようやく気分が落ち着いて、詰まったような呼吸がふと楽になってから初めて、巧くんからの最後の手紙を開いた——それはしっかりと糊で封のされた、よく見ると表に白い花の模様が浮きでている封筒だった。

ちえみへ

ちえみがこの手紙を開く頃、君はきっと、俺に記憶が戻ったことを知ったあとだろうと思う——最初に断っておくと、俺はちえみが真実を隠していたこと、少しも恨んでなんかいないよ。むしろ感謝しているくらいだ。そうじゃなかったとしたら、俺はおふくろのことを追いだした時と同様、ちえみのことまで同じように追い返していたに違いないから——この三か月、ちえみが毎日お見舞いにきてくれて、本当に嬉しかった。もしその支えがなかったとしたら、俺はたぶんあんなにリハビリに熱心に打ちこむこともなく、今頃自暴自棄になって、この病院の九階と十階にある、精神病棟にまわされていたかもしれないって、本気でそう思うくらいだ——笑いごとでなしに、本当にね。もしかしたら三宅さんから話を聞いて、俺に記憶が戻った経緯がどんなだったか、ちえみはもう知っているかもしれないけれど、改めてもう一度、今度は俺自身の言葉で、同じことを書き記しておきたいと思う。事故の起きたあの夜、俺と健は運転を交代した——隣町まで続くあの海と山に挟まれた道路は夜間は特に車通りが少ないし、曲がりくねっているとはいえ、一本道だから俺は大丈夫だろうと思って健と運転を交代したんだ。時速はたぶん七十キロくらいだったと思う——時々、カーブに差しかけた時には速度が落ちて六十キロ台だったんじゃないだろうか。カーステレオからは、健の好きなミッシェル・ガン・エレファントの曲がかかっている、俺たちはその時、ボリュームを少し下げて、ちえみの話をしていた。小さい時、ちえみは色黒で、髪も短くて、まるで男の子みたいだったけど——まさか大人になってからは色白の、ほっそりした百合のような美人になるとは、少しも想像できなかったとか、そういう話だった。俺は健に、それなのにいつから女としてちえみのことを意識しはじめたのかって聞いた。そしたら、健はちえみがあのボロアパートの下に越してきた時から好きだったって言うじゃないか。俺はその時負けたと思った——俺がちえみのことを異性として見たのは、高校で再会してからのことだったから——それまではちえみのことは男のような、女のような、親しい幼なじみとしか全然思っていなかったんだ。けど健は、もし俺が相手なら、ちえみのことを譲ってもいいと言った。ここから先は男同士の、軽蔑すべき会話として読んでくれて構わないが、とにかく健は本気だった。自分は去年のクリスマスにちえみと、他の誰にもヴァージンをやらないっていう約束をしたという話をした——でもそれを少し訂正して、自分と巧以外の他の誰にも、ということにならしてもいいっていうんだ。もちろん俺はこう言った——そんな必要はないって。ちえみはもうおまえのものだし、俺は遠い都会に住んでいる、小説書いてるお兄ちゃんっていうことでいいじゃないかって。そしたら健はやっぱり真剣な表情で、それでも万が一ということがあつた場合、その約束に縛られて、罪悪感に苦しむかもしれないと。こんなドラマのようなこと、ちえみはとても信じられないって思うかもしれないね。それが言霊というものだったのかどうか、俺にはわからないけど——とにかく、事故はその直後に起きた。遠いトンネルを抜けた、カーブの向こう側から差ししてきた光を

、今も俺は目の前にまざまざと思い描くことができる。まるで、夜の闇を切り裂いて、それは黄泉の国からの不思議な白い光のようだった——これは比喩でも幻想でもなんでもなく、向こうからやってくるダンプカーのライトの光が、現実にはそういうふうに見えたということなんだ。そしてその時、海側の白いガードレールのほうから、何か大きな白い影が飛びだしてきた。こんな話、ちえみは信じるかどうかわからないけど、それは大きな犬くらいの白いふさふさした猫で、闇の中に青い瞳を大きく見開いていた——健は急ブレーキをかけ、車は一回転すると、ダンプカーと衝突した……俺にはそのあとのことはもうわからない。あの巨大な猫のような生き物を果たして轢かずにすんだのかどうか、それすらも。ただ、記憶が戻った俺が第一に考えたこと——それはこういうことだった。あの事故は、あの奇妙な生き物のせいではなく、完全に100%自分が悪いということだ。いいかい、ちえみ？100%だよ。俺はこれまでの人生で、仮に誰かがひどい人殺しをしたとしても——その人間が100%悪いだなんてこと、まずありえないだろうって思っていた。しかし、100%その人間が悪いということが、現実にはありうるんだね。俺は仮免に受かったばかりの弟に、運転なんてさせるべきじゃなかったし、道路の雪は綺麗に除雪されて、夏道とそう変わらないように見えたとはいえ——あの夜、あの道はブラックアイスバーンのようになっていたんだろう。でなければ、あんなに綺麗に車がスピンするはずがない。ちえみ、俺は自分を裁くことにしたよ。この二か月、俺はとても幸福だった。遠くにいてタイル職人の修行をしている弟のことなど、本当は少しも考えてなどいなかったんだ。一応口では色々、弟の消息について、ちえみに質問したりはしたけど——そんなことは俺にとってはただの、形式的な質問にすぎなかった。今なら俺の勘違いとはっきりわかるが、ちえみは俺が健の名前を口にするたびに、顔の表情を曇らせていたね——それで俺はてっきりちえみも、自分と同じような気持ちなんだろうと思ったんだ。この二か月間の夢のような時間はきっと、健からの最後のプレゼントだったんじゃないかって、そんな気がする。俺がきちんと立ち直るまでの間の……もちろん、今だって頭の中は混乱しているし、どうして弟でなしに俺が死ななかったんだとも思う。一般に、運転席側よりも助手席側のほうが死亡率が高いといわれているのに何故って……でも、記憶のなかった二か月という時間が、俺の中でクッションのような役割を果たしてくれたみたいで、思った以上に俺は今冷静に、この手紙を書くことができている。最後にひとつ、俺はちえみに懺悔しなくちゃいけないことがあるんだ。俺はちえみと高校で再会して以来——想像の中で、繰り返しちえみのヴァージンを奪った。いや、想像なんていう綺麗な言葉はやめよう。妄想の中で、何度も繰り返し、ちえみのことを犯していたんだ。入院しているこの二か月の間は、ほとんど毎晩のように、ちえみと一緒に寝ていた。こんな男に愛されていると言われても、ちえみはそんな言葉、信じられないって思うかもしれない。でも俺はたぶん、健と同じくらい——ちえみが健の彼女になってしまっただけからは、もしかしたら健よりも激しい気持ちで——ちえみのことを愛していた。おそらく、もう二度と会うこともないかもしれないけれど、ちえみには他の誰よりも幸せになってほしい……その気持ちだけは、俺も健も同じだと思うんだ。一方的な手紙で申し訳ないが、俺自身もまだ混乱していて、これ以上うまく言い表せそうもない。ただ、今の俺にわかっているのはひとつのことだけ——これ以上俺はちえみのそばにいたら、自分の妄想を現実のものにしてしまうだろう。俺の想像の中では、ちえみの意志なんてまるで関係なかったし、妄想の中で俺は

ちえみのことをレイプするのを楽しんでさえいた……時にはちえみのほうから体を投げだしてくれることもあったけど——もう二度と、想像の中でさえ、俺はちえみのことを抱くことはできないだろう。さようなら、ちえみ。愛している。

その長い手紙を読み終えた時、あたしは涙もなく、ただそっと、巧くんの端正な文字の並んだ便箋を抱きしめた。そして手紙の中に小さな白い花を見つけ、それがアメフリソウだったことに気づいた時——また涙がこみあげてきた。正直いって、巧くんの手紙はひどい手紙だった。作家にしてはひどい文章だとか、自分のことを妄想の中で繰り返し犯したと書いてあるからではなく——彼自身、自分で書いているとおり、あまりにもそれが一方的な内容だったからだ。

（それじゃあ、あたしの気持ちは一体どうなるの？これから、どうしたらいいの？）

「こんなのひどいよ、巧くん……」

呟いた時、さあっという雨音が聞こえ、それはやがて激しく、病室の窓を叩きはじめた。病院へきた時にはからりと綺麗に晴れ上がっていたのに——あたしは窓から青い空と白い雲を眺め、きっと天気雨だろうと思った。そして雨がやむのを待ってから、十階建ての大きな総合病院をあとにすることにした。

あたしはそれから、喫茶店でアルバイトをしながら、夜間の予備校に通いはじめるようになった。それは来年、看護学校を受けるため——あたしは半年後にある受験に向けて昼間はバイト、夜は勉強と、とにかく何も考えずにがんばった。何も考えずに頭を空っぽにして肉体労働に勤しみ、心を空っぽにして、勉強に励む、そうしていれば、余計なことは何も考えずにすんだ。看護婦になろうと思ったのは、三か月の間、巧くんのお見舞いについていた時の経験によって、だった。彼が作家だからということもないだろうけれど、あの病棟の看護婦さんたちはとても感じのよい人ばかりで、自分もあんなふうになりたいと思ったのがきっかけだった。もしわたしが自分の悩みだけで頭をいっぱいにして、自分のためだけに苦しむとしたら——そんな地獄は他になかった。それくらいなら、少しでも人の役に立つことをして、その傍らで自分のことで頭を悩ませたり苦しんだりしたほうがまだしもましだと思えたのだ。

そして、看護婦になるまでの道のりは決して平坦ではなく、時にはもう何もかも投げだしてしまいたいと思うことも度々だったけれど——あたしは無事三年制の看護学校を卒業し、ちょっとした偶然から、巧くんの入院していた総合病院に新米の看護婦として勤めることになった。しかもどういふわけか最初からICU付きの看護婦で、仕事を完全に覚えるまで、毎日が大変なんていうものじゃなかったけど——他の看護学校時代の友達もまたCCUやらオペ室やらに専属として配置されており、互いに毎夜電話で愚痴や泣きごとをこぼしあっては、なんとかがんばっているという毎日だった。

それからやがて仕事に慣れていくに従って——あたしは恋愛とか結婚とか、そういうことについてはまったく考えないようになっていった。友達の中には彼氏がいればこそ、こんな仕事でも耐えていけるとか、早く結婚して看護婦なんてやめてやるとか、色々意見があったけど、あたしは別だった。時々お節介からダブルデートを仕組まれたりはしたけれど、そのうちの誰ともつきあおうとか、つきあいたいとか、そういう気持ちにはまるでなれなかった——昔の思い出を引きずっているとか、健ちゃんの事故が忘れられないとか、そういう感傷的なことではなく——あたしは一生結婚なんてせずに、このまま死ぬまで処女でも全然構わないと思うようになっていた。看護婦になって、三年がたち、ICUから一般病棟のほうに移り、大体一週間に一度、リーダーを任せられるようになる頃には。

けれども、そういう時に限って、運命というものは動きだすものらしく、あたしは病院職員の観楓会で親しくなった、理学療法士の西尾くんという人とその後つきあうようになり——二年後には結婚して、看護婦を一時引退することになった。西尾くんはとても真面目な人で、白い細面の顔にインテリそうな眼鏡をかけているところが、なんとなく巧くんに似ていた。そしてわたしは彼に結婚するまでは貞操を守りたいと言い、それでいいならこれからもずっとおつきあいましょうという条件をだした。友達には「何それ、信じられない！」とか「石器時代の遺物」とか「結婚してから体の相性が合わないことに気づいたらどうすんの？」とか、散々色々言われたけど——健ちゃんは結婚するまでそういうことはしないと約束してくれたのだ。それなのに、それ以下の条件で他の誰かと結婚するだなんて、とてもいけないことのような気がしたのだ。

今では巧くんのことは、彼が大体年に一冊のペースで上梓する、小説を通してその消息を知る

のみとなった。それだってわたしにとっては、今ではとても大きな喜びになっている。もし巧くんが小説家でもなんでもなくて、普通の一般の職業についていたとしたら——あたしは彼が今現在どうしているか、幸せなのか不幸なのか、仕事はうまくいっているのかどうか、とても気にかかっていたかもしれない。でも彼は自分の愛する職業について、その仕事もとてもうまくいっているのだ。

(巧くんが幸せであってくれさえしたら、あたしはそれでいい)

今では、そう達観することさえできるようになった。もしかしたらあたしはあのあと、彼に対して手紙を書いて——手紙なら、出版社の編集部気付で出せばいいわけだから——自分の気持ちを吐露すべきだったのかもしれない、とも思う。自分も、巧くんに肉体を貪りたいという強い望みを持っていたということを、告白すべきだったのかもしれない。でもすべては今となっては済んでしまったことだ。

巧くんはあれから八年たった今も結婚してはおらず、いつだったか何かのインタビューで、自分は出雲健一郎と同じ独身主義者で、一生結婚することはないと思う、と言っていたことをあたしは時々思い出すことがある。何も結婚ばかりが人生の幸福というわけではないとは思いますが——巧くんの書く小説にある官能的な場面を読む時、あたしは不思議と自分が犯されているような気がして、恍惚とした悦びに浸ることがあった。そしてそういう時、自分も彼と同じく一生結婚などするものかと心に決めたものだった。

でもあたしは結局二十七歳で結婚することになり——夫となった人は、確かに新婚初夜になるまで約束を守ってくれた——ハネムーンは彼の趣味で、イギリスの妖精伝説の残る地方を訪ねるということになった。それはあたしにとっては初めての海外旅行の夜で、英語の堪能な夫に尊敬の念を抱きつつ、あたしは彼に抱かれたわけだが、何故わたしがすべてが終わったあとで涙を流したのか——きっと夫には一生わかることはないだろう。

わたしは夫のことを愛していた。けれども初めて訪れたイギリスの地で抱かれたかった相手は彼ではなかった。夫はわたしの涙を、純潔のしるしか何かのように勘違いしていたようだったけれど——あたしは巧くんにごく普通に雰囲気似ている男を結婚相手として選び、本来なら巧くんと旅行するはずであった地で、彼に似ている男に抱かれているにすぎないと、その時になって突然はっきりと気づいてしまったのだ。

(さようなら、巧くん、健ちゃん……)

あたしは隣で眠る夫の静かな寝息を聞きながら、今になってようやく——自分が思春期という初恋の季節に別れを告げようとしているのだと気がついた。これから先も決して真実を分かちあうことはない、生涯の伴侶の傍らで……。

終わり

健ちゃんとわたし

<http://p.booklog.jp/book/29299>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29299>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29299>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.